

2017年度三重大学人文学部における

# F D 活 動

報 告 書

2018年（平成30年）3月

三重大学人文学部

## 2017年度FD活動報告書に寄せて

人文学部にFD委員会が設置されたのは2003年のことであり、本学部のFD活動は今年度で15年目を迎えました。一つの節目の年であったともいえます。FD委員会は毎年「FD活動報告書」を編集してきたので、これまでの活動の記録を経年的に把握することができます。その報告書よりまとめると、人文学部のFD活動は、次の5種の取り組みから構成されています。(1)主にカリキュラム単位で行われるFD研修会、(2)多様な講師を呼んで開かれるFD講演会、(3)学部生・大学院生を対象とした授業評価アンケート調査、(4)教員を対象とした授業の内容・工夫に関するアンケート調査、(5)教員対象のFD活動に関するアンケート調査。かつて行われていた教員による授業参観が実施されなくなったこと、一方で大学院に関するFD活動の内容が増えたことを除けば、こうした枠組みは、基本的には、これまで大きく変わっていません。それぞれが、人文学部のFD活動において重要な意味を持ち、それ故に継続されてきたといえます。

しかし、例えばFD講演会の内容に注目してみると、そのテーマ設定には変化が見られます。2004年度、2005年度、2006年度においては、他大学(佛教大学、京都大学、和歌山大学)の教員をお呼びして、それぞれの大学のFD活動の実践例から学ぶという内容でした。その後、2007年度には「大学における不登校学生への対応」、2008年度には「ハラスメント事例に対して大学がすべきこと、できること」というテーマになり、テーマ設定の幅が広がってきたといえます。最近の例では、2015年度の講演会は「ITの発展と大学教育：進化したMoodleの意義」、2016年度は「学生へのキャリア支援について」、2017年度は「不登校学生等への対応について」というテーマです。授業を進める上での工夫を考えるとだけでなく、様々な側面で学生支援が必要とされるようになり、それに合わせて、講演会のテーマ設定も変わってきたように思われます。

これまでの15年にわたる経験と蓄積を踏まえて、FD活動の意義を再認識し、今後の発展へつなげていくことが求められています。これまで変わらずに続けられてきたFD活動の重要な部分を引き継ぐと同時に、大学を巡る状況と学生達の変化に合わせて活動の内容を変えていくことにより、両者を合わせて、今後の継続を図ることが重要でないかと思われれます。

2018年3月

三重大学人文学部長

安食 和宏



# 目 次

2017年度FD活動報告書に寄せて

I. 2017年度FD活動の総括	1
II. FD研修会	3
1. 6月FD研修会	3
2. 11月FD研修会	8
III. FD講演会	9
1. 9月FD講演会の記録	9
2. 講演会配布資料	31
3. 講演会のアンケート結果	35
IV. 学部生による「授業改善のためのアンケート」	37
1. アンケートの概要	37
2. 調査結果	39
V. 教員による「授業に関するアンケート」	53
1. アンケートの概要	53
2. 調査結果	53
VI. 大学院に関するFD活動	61
1. 大学院生による「授業改善のためのアンケート」	61
(1) アンケートの概要	61
(2) 調査結果	62
2. 「三重の文化と社会」報告会、修士論文発表会への教員の参加	71
3. 大学院に関するFD研修会	77
VII. 教員による「FD活動に関するアンケート」	81
1. アンケートの概要	81
2. 調査結果	81

巻末資料 1 授業アンケート（学びの振り返りシート、授業改善のためのアンケート）

巻末資料 2 授業に関する教員アンケート

巻末資料 3 修士論文発表会に関する教員アンケート

巻末資料 4 FD 活動に関するアンケート

巻末資料 5 2017 年度 FD 委員会年間活動

## I . 2017 年度FD活動の総括

## I. 2017年度FD活動の総括

2017年度も人文学部は着実にFD活動を行った。以下に、2017年度年間FD活動の総括を行いたい。

まず、FD研修会については、6月と11月に行った。6月のFD研修会は、例年通り、8つのカリキュラム単位で実施した。共通のテーマは、「2017年度実施授業アンケートの自己分析と授業の改善方法」であり、各カリキュラム単位で議論された内容は、以下のようなものであった。IpadやDVD、Moodleを活用した授業方法、リアクションペーパーの有用性、グループディスカッションの効果、シラバスの活用、授業配布資料の形式、情報リテラシー向上の必要性等々。いずれも授業運営においては大事な事柄である。6月FD研修会については、マンネリ化しているとの見方もあるが、グループによっては、PBL科目における講義の進め方など独自の主要テーマを設定して工夫を行っている。カリキュラムによっても課題は様々であり、効果的な研修会にするため、課題の認識、解決に向けた自発的な取組が求められる。

11月FD研修会は、2016年度までは12月に行ってきたが、センター試験の説明会と重なることなどから、今年度は11月に実施した。11月の研修会では、昨年度に引き続き大学院における教育を取り上げる形で実施した。大学院の専修が廃止されたことや参加教員数の規模を考慮して、実施単位を昨年度の4グループから5グループに変更した（地域文化論専攻は、「哲学・思想、社会」、「歴史学、地理学、図書館・情報学」、「言語・文学」、社会科学専攻は、「法制」、「現代経済」）。取り上げられた内容は、以下のようなものである。指導内容、院生同士の交流、留学生への対応、大学院進学者数の確保等々。今後さらなる組織上の発展と教育内容の充実を目指している人文社会科学研究科にとって、大学院教育に関するFD研修会を実施していくことはとても重要であると思われる。

次に、FD講演会であるが、今回は9月に本学の学生総合支援センターから鈴木英一郎氏を講師としてお迎えし、「不登校学生等への支援について」という演題で講演を行っていただいた。講演では、大学での不登校学生の現状、不登校学生の心理、予防対策、対応のポイントなどに関する詳細な説明がなされた。講演会のアンケートによると8割以上の教員が不登校等の困難事例に直面したことがあることから、困難学生への対応の仕方などの有益な情報を得ることができたと考えられる。

授業改善のためのFDアンケートは、今年度から大幅に変更となった。これまでの紙とウェブでの実施から、ユニバーサルパスポートでの実施へ変更された。7月及び1月に実施したが、新たな手法での実施であったこともあり、回答率が前回よりも低下している。アンケート結果は総合的に見て良いもので、最重要項目ともいえる満足度では今回も4.0を超えており、以前の年度から引き続いて学生からの評価が高いまま推移していることが確認された。

2017 年度から新しい形態のアンケートが導入されたが、今後、回答率を向上させる取り組みを進めるとともに、対象授業の考え方や大学院生への対応など、従来の方法を見直す必要もある。学生が授業の振り返りを適切に行うとともに、教員が授業内容をより良いものにするためにも、アンケートの在り方について引き続き委員会で検討する必要があるだろう。

2017 年度 F D 委員会委員長 石塚哲朗



## II . FD研修会

## II. FD 研修会

### 1. 6 月 FD 研修会

日 時：2017 年 6 月 14 日（水）14:00～15:00

テーマ：2016 年度実施学生アンケートの自己分析と改善方法

6 月の FD 研修会では、例年通り、前年度（2016 年度）に実施された「授業に関するアンケート」の集計結果を用いての報告と意見交換が行われた。各カリキュラム単位の研修の概要を以下に記す。

#### [1] 文化学科

##### (1) 日本地域

出席 7 名 欠席 1 名

[授業アンケートについての報告・議論の概要]

報告者：山田雄司

報告の概要：2016 年度前期教養教育科目「日本史 B」について、授業アンケートに基づいて報告があった。この授業は最初 380 名ほどの履修登録があり、それを抽選して 220 名ほどにすること、多量のレポートに目を通すこと、期末試験等において人数が多いので負担が大きいことが報告された。授業はビデオを見せたり教科書を用いたりしていることにより、比較的评价が高いことが報告された。

議論の概要：教養教育改革によって履修者に変化はあったかの質問があり、変わった授業もあれば変わらなかった授業もあり、同時間に行われる授業によって大きく左右されるのであろうとの結論だった。オムニバスの授業が増えて大変である。果たして学生はこうした授業によって理解力が増しているのかどうか。

##### (2) アジア・オセアニア地域

出席 9 名 欠席 1 名

[授業アンケートについての報告・議論の概要]

報告者：深田淳太郎

報告の概要：2016 年度後期開講「アジア・オセアニアの社会 B」「アジア・オセアニアの民族と文化 B」に関する授業アンケート結果の分析および授業の組み立て方について報告が行われた。授業アンケート結果をみてもどのように改善に活かせばよいのかわからない項目もあるが、教員付加項目では授業方法（ipad の画面をプロジェクタで映して

黒板がわりにする) が支持されていることを確認できた。またアンケートよりもリアクションペーパーの方がよい意見が出てくることが多く授業改善に役立つ。リアクションペーパーで次回のテーマについて質問をして答えさせたうえで授業終了後に再度感想を書かせるという、リアクションペーパーを積極的に使って授業を組み立てる試みは、受講生の理解度が把握でき、授業内容が充実するとのことであった。

議論の概要：以下の点について意見交換がなされた。

- ・リアクションペーパーの活用方法。授業終了後に感想を書かせるのみでは毎回同じような内容が寄せられてしまうので、次回授業内容についてあらかじめ質問に答えさせる方法はよい。こうすることで次年度授業内容の更新・変更も可能となる。またよいコメントは次年度以降の授業にも利用できる。リアクションペーパーを添削・返却するのは難しいが、コメントは受講生に配布した方が受講生にもよい刺激となる。
- ・電子機器の利用。PowerPoint を利用してプリントアウトした資料を配布すると、学生の集中力が持続しない。Ipad の画面を見せて紙のレジユメを配布するとその問題が解消される。
- ・授業内容・利用する映像資料の変更時期。

### (3) ヨーロッパ・地中海地域

出席 10 名 欠席 2 名

[授業アンケートについての報告・議論の概要]

報告者：服部範子

報告の概要：2016 年度前期開講の「英語 I TOEIC 初級クラス」に関して、授業の概要、学習目的、成績評価方法と基準、学生による授業評価結果等々が紹介された。

また、この授業を担当するにあたって、以下の点に留意していることが報告された。

- ・とりわけ初級クラスにおいて、受講態度がよくない学生への動機付けをどうするか。
- ・ともすれば「問題を解き、解説を聞く」ことに終始してしまいがちな授業運営に何かプラスアルファをつけ加えて、学生の授業への参加度を高めるにはどうするか。

議論の概要：報告後、以下の点をめぐって、質疑応答、議論がなされた。

①「英語 I TOEIC」では、どのクラスでも同じ期末試験を行っているが、そのことによる支障はないのか。⇒支障が生じないような様々な措置を取っている。②同じ期末試験を行っていることの意味は何か。⇒平等性、公正性を保つためである。③e-learning の内容と TOEIC の教科書との関係はどうなっているのか。⇒直接、関係はない。なお、e-learning によって、学生の授業外学習が担保されている。④授業の概要、学習内容、成績評価方法等に関して、非常に制約が大きい科目であるが、教員のオリジナルであるスクリプト(教科書の CD から作成された)の使用は、学生から高い評価を受けており、有効だったのではないかと。

#### (4) アメリカ地域

出席 8 名 欠席 0 名

[授業アンケートについての報告・議論の概要]

報告者：小田敦子

報告の概要：専門科目「アメリカ文学演習」、教養教育英語、教養ワークショップの各アンケート結果にもとづき報告された。アクティブラーニングの導入が3年目を迎え、教養教育の取り組みを共有する貴重な機会となった。

議論の概要：英語については、英語の読解にグループワークを取り入れるメリットと課題が話し合われた。能力別の上位クラスには効果的だと考えられる。教養ワークショップは、書評を完成させるアクティブラーニングの方法について、意見を交換した。教員側が授業の組み立てと意義を説明することが重要である。ピア・レビューで適切な発言を引き出すための指示方法についても有意義な提案がなされた。

### [2] 法律経済学科

#### (1) 統治システム履修プログラム（法政コース）

出席 6 名 欠席 2 名

[授業アンケートについての報告・議論の概要]

報告者：古瀬啓之

報告の概要：今年度後期より専門 PBL が開講されるため、教養 PBL を 2 度ご担当いただいている古瀬教員より、PBL 科目における講義の進め方についてご報告いただいた。その概要は下記の通りである。

PBL 教育では、第一に学生が自らの関心に基づき自主的な学習を行えるようになる。第二に議論を通して自らの意見を客観化でき、そして第三に協調性が養われ、学生同士が友人関係になり、孤立化を防止する効果がある。

一方でそのデメリットとしては、第一に個々の関心を重視しすぎるとテーマが多方面にわたり、グループ発表が困難になってしまう。第二にグループが複数になると教員の関わり、チェックが手薄になってしまう。そして第三に評価の手法の問題として、プレゼンテーションの質は最大公約数的なものになりがちで、結果のみを基準とすると評価が困難になる。第四にグループ内で怠ける学生の評価が難しく、さらに、プレゼンにのみ学生の関心がいき、そこそこの内容で勉強を済ませる傾向がある。

アンケート調査については、参加人数の多寡により満足度に差が出ている。教員の立ち位置をどう考えるかが今後の課題である。

議論の概要：教養 PBL での知見を専門 PBL にどう活かすべきかについて活発な熟議が行われた。

第一に、評価方法については、結果のみを重視すると問題解決のプロセスが軽んじられてしまい適切ではないのではないかと、各人の達成度は数量化するのが困難ではないかとの見解が示された。

第二に、学生の自主的な学習を促すためには、課題を提示する際に、次回までに学生に

対してテーマ等を指定し、短期間での到達目標を立てさせ、次週に再度チェックを加えるという方策が有効であるとの見解が示された。また、この点に関連するが、専門 PBL は教養 PBL とは異なり、学生の自主学習のコマが存在しないため、次回までに教員側が学生に何をすればよいのかを明示する必要があるとの指摘もなされた。

第三に、学生のモチベーションの維持については、専門 PBL の場合は不本意な学生も参加する可能性が高く教養 PBL とは前提が異なるとの指摘がなされた。他方で、教養 PBL での知見（強制的な枠組みの使用と「任せるぞ」という役割の付与）を活かすこともできるとの意見も出された。また、グループ間の順位付けをする方策が提示される一方で、順位付けをするとプロセス重視の理念が損なわれるとの指摘や、学生間の仲が険悪なものとなり潰し合いが生じかねないとの懸念も示された。

第四に、PBL の進行方法については、専門 PBL が教養 PBL に比べてコマ数に制約がある点を踏まえたとき、教員側で予めテーマを具体的に特定しておいた方が望ましいのではという意見や、学生間の役割分担を明確にしたほうが望ましいとの意見が示された。また、専門 PBL の趣旨（アプローチの仕方が学問間で異なることを学ぶ）に沿った進行方法をとることが望ましいのではという意見も提示された。

## (2) 生活法システム履修プログラム（法政コース）

出席 7 名 欠席 0 名

[授業アンケートについての報告・議論の概要]

報告者：伊藤 睦

報告の概要：

- ・ 2016 年度前期開講の「刑事訴訟法」と後期開講の「刑事政策」について、授業の方法等や授業アンケートの結果が報告された。
- ・ 毎回レジュメを配布するが、重要なところは板書してノートにとらせたり、一部でパワーポイントやDVDも使用したり、といった工夫を行っている。
- ・ 成績は基本的には試験により返却はしないが、聞きに来た学生には点数と理由を開示している。
- ・ 非常勤先での授業アンケートとの比較に基づいて、学生のレベルに応じた授業を展開していることも報告された。

議論の概要：

- ・ パワーポイントやDVDを使う場合、映写の準備に時間がかかったり暗くなるのでノートがとれない、という短所もあるが、説明しやすい、という長所は大きい。
- ・ 授業アンケートを全科目ユニパでやるとすると、回答率が著しく低下して、6月のFDが実施できなくなるのではないかと。
- ・ 答案の書き方の指導、試験の持込みについては、どの教員も模索している。
- ・ アンケートの「自由記述」のところに意味はあるのか、今後も続けるのか。

**(3) 地域経済履修プログラム（現代経済コース）**

出席 6 名 欠席 0 名

[授業アンケートについての報告・議論の概要]

報告者：朝日幸代

報告の概要：2016 年度後期に行われた「地域経済分析」について、報告が行われた。講義内容、シラバスを踏まえて講義形式が紹介された後、アンケートの各項目について、自己評価や課題が報告された。

- ①地域経済分析では、コンピュータ実習の講義であるため、講義資料はファイルで作成し、ファイルごとで配布している。
- ②地域経済データを用いて、計量経済学的方法で用いた分析を解説する。統計学、計量経済学の回帰分析、産業連関分析の内容で構成している。
- ③地域経済データを自ら用意し、統計学、計量経済学的手法を活用することによって分析することを理解する。様々な地域問題について、データから考えることが目的の講義である。
- ④学生の能力に大変差があり、計量経済学を学んだ上で履修した学生は講義内容を理解して取り組む一方で、経済学関連の講義を学んでいない学生にとっては、理解できていない可能性がある。
- ⑤復習が常にできるように、講義で利用する資料はファイル形式で配布する。復習ができるファイルも配布している。
- ⑥理解度は半数以上の学生が理解できているに分類されるが、一部の学生には理解されていない状況である。毎回の講義で前回の講義の復習問題を行う課題を出しているが、それらについても熱心に取り組む学生とそうでない学生に分かれる。
- ⑦欠席した学生は、次の講義についていけない状況になる。

議論の概要：

- 1) ファイル配布方法は総合情報センターのサーバー内のフォルダーを利用して配布している。Moodle の利用も便利であることから、利用したらどうかとの意見があった。
- 2) 出席確認にも活用できる。多くの学生が受講する講義については出席確認方法として顔認識や学生証読み取りの機械があるとよい（100 名以上の講義室）。
- 3) 専門についての科目なので積み上げがしにくい。学生の関心を高めることが課題である。（本年度はマクロ経済学は集中講義から通常講義に変更をした。）
- 4) 学生がノート PC を携帯するようになれば、資料配布などが便利になる。  
その他、講義を行う際にこのノート PC を活用する学び方ができる。
- 5) 講義の Web アンケートについてはスマートフォン対応にすれば、講義内でアンケートを行ってもらえ、アンケート回収率が高まるとの意見が出された。

**(4) 企業経営履修プログラム（現代経済コース）**

出席 6 名 欠席 0 名

[授業アンケートについての報告・議論の概要]

報告者：森 久綱

報告の概要：2016 年度日本経済論特論の授業評価アンケート（紙媒体）に基づき報告がなされた。報告内容は、アンケートの概要とそれに対する考察から成り、特に以下のような論点が提起された。

- (1) シラバスの活用が不十分であり、学生が履修体系を意識していないのではないかと。

(2) 独習が不十分である。レポート 1 回のみが原因と推測される。

(3) 満足度と知識獲得は高いが、理解度(主観的にも試験でも)が低いという矛盾がある。

講義スピードを落としたものの、理論的に難しい問題を扱ったことが要因ではないか。

(4) 授業配布資料の形式について意見交換したい。

議論の概要：報告に関連して出された意見の一部を箇条書きにする。

- ・現在のアンケート結果は以前のものに比べて授業改善のために役立てにくい。
- ・独習に関しては、作業の仕方、理解の手順、現実と理論の媒介など「知の技法」的なことを伝える工夫が必要。
- ・昨今の学生の状況では、そもそも独習に使える時間が少ない。
- ・配布資料の形式は、科目によって適切な形は異なるが、学生にメモさせる、グラフを自分で描かせるなどの工夫をしている。

また、上記報告とは別に、学生の情報リテラシーを高める工夫の必要性（新聞の読み方を教える、学生ラウンジに新聞を設置する、など）、卒業論文の指導方法に関する意見交換がなされた。

## 2. 11 月 FD 研修会

11 月 8 日（水）に大学院教育に関する FD 研修会を実施した。その報告については、本報告書の「VI. 大学院に関する FD 活動」に記載した。

### Ⅲ. FD講演会



## Ⅲ. FD講演会

### 1. 9月FD講演会の記録

日時：2017年9月13日（水）14:00～15:00

講師：鈴木英一郎（三重大学学生総合支援センター・学生なんでも相談室室長）

演題：「不登校学生等の対応について」

【司会】 今年度のFD講演会を始めさせていただきたいと思います。今日の講演会は、「不登校学生等の対応について」ということで、学生総合支援センターの学生なんでも相談室の鈴木先生にお話をいただきたいと思っております。不登校学生等ということ、不登校学生に限らず、いろいろ困った学生の対応について話を聞いたりしますので、現状、対応の方法、具体的に事例、そういったものを紹介いただけるのではないかと思います。それでは、鈴木先生、よろしくお願いいたします。

【鈴木】 皆さま、こんにちは。ご紹介いただきました、学生総合支援センター、学生なんでも相談室の鈴木と申します。人文学部さんにはいろんな機会に何度かお招きいただきまして、感謝しております。今日はさわやかな秋空にもかかわらず、さわやかでないお話をさせていただくかと思っておりますけれども、また先生方ともいろいろ一緒にディスカッションしながら考えていけるといいなとも思っておりますので、ぜひ、いろいろご意見をいただけたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

では、お話を進めていきたいと思うんですが、「不登校学生等の対応について」というお話をいただきましたので、主には不登校学生に関してのお話を進めていきたいと思うんですが、事前に先生方から幾つかご質問事項もいただいておりますので、さまざまな状況で応用可能なお話としてお聞きいただければなというふうに思います。適宜、ご質問の内容にも触れていければなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

「アンケート結果から」というところから入りましたけれども、以前、人文学部さんでお話しさせていただいたときにも紹介をさせていただいたものですが、2011年度になるかと思うんですが、学生総合支援センターのほうで全学規模で先生方に学生対応に関する意識調査みたいなことをさせていただいたことがあって、そのときの結果の1つで、困難学生の対応経験についてというところでお聞きしているものです。全学のデータではありま

すけど、学力不振、学力低下の学生の対応経験があるという先生が73%おられて、不登校の学生の対応経験があるという先生が82%で、うつ病などの精神疾患を持つ学生の対応経験があるとお答えになられた先生が80%おられたということです。

そんなに数字の差はないとはいえ、こうやって数字だけで見ると、不登校学生の対応経験というのが、先生方にとって一番大きな数字になっていて、非常に先生方を悩ませている問題の1つかなというふうに考えられるところです。多くの先生方が困難な学生の対応経験を持っておられるということが分かったかなということです。

そんなわけで、不登校の特徴とかその対応についてお話を進めていきたいところなんですけど、不登校と一口に言っても、いろんなタイプの方がおられるんです。例えば、引きこもり概念ではありますけど、精神医学的な観点から見て引きこもり概念を整理したものなんですけど、引きこもりは必ずしもイコール不登校ではないとは思いますが、かなり近い状態群ではあるかなというふうに思いますので、参考までにお話をさせていただきますと思います。

分かりやすいところで言うと、2次性というものが1つあって、引きこもりっていう大きな概念の中で、2次性というのは精神疾患の症状として引きこもりが出ていると。何らかの精神疾患が先行していて、症状の1つの表れ方として引きこもりが起きているというのが2次性という部分です。0次性となっているのが精神疾患の原因とありますが、引きこもっているうちに、それ自体が何らかの精神疾患を引き起こしていったような状態のことを指しています。

実際、長期に引きこもっているということ自体が人格形成にかなり大きな影響を与えていくというようなことは言われていたりしますので、引きこもっているうちに何らかの精神的な疾患が引き起こされていくというものもあったりするということです。

1次性というのは精神疾患の症状はなくて、いわゆる社会の中で適応がうまくいかなくて、引きこもっているというものを指すんです。一般に社会的引きこもりというときには、この0次性と1次性という群をひっくるめて、社会的引きこもりというように言っているようです。

これをご紹介させていただいたのは、あくまでも引きこもりとか不登校とかというのは、状態に対する名称でしかなくて、必ずしも不登校イコール病気、引きこもりイコール病気というものではないと。ましてや診断名ではないので、そのあたりが誤解されるところがあるんですけども、必ずしもイコール病気というわけではないし、それ自体が診断名

というわけではないというところをぜひご理解いただければありがたいと思います。

とは言いつつも、精神疾患というところで言うと、何らかの精神疾患との絡みがあるケースというのももちろん少なくはないというのが現状です。

次に、厚労省が2010年に「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」というものを出していて、そこに出ているものなのですが、やはり精神医学的な観点から見た引きこもりの分類とその対応に関するストラテジーという表です。ざっくり言って3タイプあって、第1群として挙がっているのが精神疾患の症状の表れの1つとしての引きこもり、不登校ですね。先ほどの第2群という形で示させてもらったものです。第2群に挙がっているものが発達障害に伴う2次的な問題としての引きこもり、不登校というものではないかと思えます。第3群に当たるのがそれ以外のいわゆる心因性といえますか、心理社会的な要因による不適應として不登校が表れてるという群を指しているものです。それぞれこういう対応ができるということが書いてあるものです。

これ、面白いなというか、ご紹介させていただいたのは、発達障害に伴うものを1つ群として掲げているというところなんです。実際、地域の精神保健福祉センターさんなんか結構引きこもりの相談があるわけですけど、引きこもりの相談で来談された方に関する調査で、全体の30%弱ほどに発達障害の診断が付いたというようなデータがあったりします。だから、地域の精神保健福祉センターさんに相談に行かれる引きこもりのケースのうち、3人に1人ぐらいは発達障害の診断が付いたというお話だそうなんです。

ちょっと多すぎるんじゃないかなという気もしなくもないんですけども、ただ、いずれにしても発達障害を持つ方、発達障害を持つ学生が不適應を起こしやすい状況があって、結果的に引きこもりという形で表れてくるということは、1つ大きな要因として言えることなのかなというふうには思えるわけです。

大学生の不登校についてお話を進めていきたいと思うんですけど、これはかなり古い調査ではあるんですけど、1996年ですけど、香川大学さんのほうで、やはり教員を対象にした不登校に関する調査をされていて、この枠の中に書いてあるのは、大学生の不登校に関する調査をされたときに、どういう状態を大学生の不登校として定義したかということに関して書かれてあるものです。そのときに定義されたのが3カ月以上登校していない。ましてや講義に出ていない。もう1つが身体的な病気、あるいは重篤な精神的な病気がない。ないにもかかわらず来ていないということです。さらに家庭にも大学にも登校を妨げる理由がない。ないにもかかわらず来ていないという。これが大学生の不登校として定義され

ました。

これに当てはまる学生がどのぐらいいますかというようなことで、香川大学さんで調査をされた結果、男子学生さんの1.16%、女子学生さんの0.58%、合計0.9%の方がそれに該当したということです。回収率から推定される実際の割合というのが、恐らく1.2から2%。そのぐらいのパーセントで不登校の学生さんがいるだろうということなんです。

香川大学さんがネットで調べましたら、全学生の学生数が5000人から6000人ぐらいということだそうなので、大学の規模としてもほぼ三重大学と同等と見ていいのかなというふうには思いますけれども、そのぐらいの大学の規模でこのぐらいだということです。

ちなみに本学に相当する調査データは今のところないんですが、そのまま当てはめれば7000人前後ぐらいですから、100人前後ぐらい存在する可能性があるのかなというところなんです。本学にも100人前後ぐらい、支援を受けている、受けてないにかかわらず、100人ぐらいの不登校になってる学生さんがいるんじゃないかなという推測が成り立つということです。

ちなみに当相談室のほうでは、ニュースレターというのを年度に1回か2回、作成させていただいてるんですが、そのニュースレター作成の際にこういうデータを出してみたことがあります。これは平成25年から27年度における不登校を主訴とする問題とその対応に関する新規相談申し込み、問い合わせの件数です。要は、平成25年度には学生本人からの不登校を主訴とする問題の相談申し込みが7件あった。教職員からの相談申し込みないし問い合わせが3件あった。保護者からの不登校に関する新規相談申し込みないし問い合わせが7件あったというようなものを指している数字です。

あくまで新規受付の件数ないし問い合わせの件数なので、実際は受け付けてから、その後、継続的な相談を進めていくので、延べ数としてはもうちょっと何倍かという感じにはなってくるんですが、いずれにしても相談室でも増加傾向にあるかなというふうには思います。

実際、先ほどのデータで言うと100人ぐらいいるんじゃないかなという話でしたので、実際にはまだまだ数多く存在してるんだろなという気がします。そういう意味で言うと、ほとんどのケースに関しては担当の先生方で抱えていただいている、ないしは保護者のほうで抱えていただいている、ないしは人知れず不登校の状態になっているということがあられるのかなというふうに思われます。

大学生の不登校のタイプということでタイプ分けをしてみたんですが、まず①としては

非行退学傾向としての不登校ということで、大学生にはあまり多いタイプではないと思います。むしろ小・中・高校なんかでよくみられるタイプかなという気がします。要はさばっていたり、非行傾向があって来ないというような不登校です。そういうことであれば規律をきっぱり伝えて、厳しく指導してということになるんだろうと思いますが、大学生の不登校のタイプということでいうと、以下から説明するもののほうがより重要かなと思います。

②が積極的なモラトリアムとしての不登校ということで、大学や学業以外に活動の場を持っていて、そこでの生活にやりがいを持っているような場合です。要は大学とか学業にあまり関心を持ってない。それ以外のところで活動の場を持っていて、そういうほかのことで活動することを楽しんでいて、そこでの生活にやりがいを持っている。だから、あまり大学とか学業に目が向いていないというようなものです。そういうことであれば性質をよく検討した上で、ある程度認めてあげるなんていうことも、青年期の発達から言うと実は大事だったりするのかなというふうに思ったりします。

ここからがとても大事といたしますか、よく見かけるものだったりするんですが、いわゆる登校拒否としての不登校ということで、神経症、ノイローゼ的状态、本人も行かなくてはいけないという思いがありながらも、体が言うことを聞かないといった状態であるタイプです。いわゆる不登校という状態を想像したときに、最初に思い浮かぶタイプかなというふうに思います。行かなくちゃいけないことは分かっているんだけど、体が言うことを聞かない、体が動かなくてと、しんどくてというような状況であるということです。

過剰適応気味の傾向、カウンセリングには乗りやすいというふうに書きましたが、過剰適応というのは周りに合わせようとしすぎて、そういう意識が強すぎるあまりに自分を出すということができなくなっちゃって、自分を押しえすぎちゃって、それでストレスをためていくというような状態を指している言葉なんですけど、そういう傾向のある子だと、結構周りの顔をうかがっちゃうといたしますか、素直な子が多いですね。裏返せば。そういうところがあるので、割と1回カウンセリングに乗ってくれば、継続的に支援はしやすい子という言い方もできるかなとは思いますが。そういう子なので、生活環境、家族関係とか友人関係とか、先生方との関係とかということの調整をある程度していきながら、うまく乗せていくということが必要になってくるかなというところでは。

最後に挙げるこのタイプがちょっと厄介なタイプかなと思うんですが、無気力としての不登校、スチューデント・アパシーなんですけど、ゲームやパソコン等に熱中して社会的

なつながらを持とうとしない。本人に何とかしなければという姿勢が乏しいですね。なので、本人よりも周りが困惑してしまうというような感じです。結局、現実の課題とか問題に直面できないタイプの方で、直面できずに回避しようとするんです。回避してしまえば短期的には直面しないで済むわけなので、悩まずに済むから、直面せずに回避、直面せずに回避というのを繰り返した結果、不登校になってるわけですけど、長期的には解決にはなっていないということです。

本人は当面回避しちゃえば悩まなくて済むので、悩まないという状態をずっと続けてるわけですけども、結果的に周りのほうが困惑してしまうということがあると思います。そんな方なので自発来談に至ることは極めてまれということがあります。周囲の働き掛けがかなり重要なと思います。先ほどの当相談室の例を出させていただきましたけど、本人の来談よりも先生方の問い合わせだったり、保護者の方の問い合わせだったりのほうが多かったということが気付いていただけたかなと思います。

実際、本人が来談するという事はなかなかないということはないですけど、少ないですね。大学に対して来れない学生が大学に相談に来るとするのはハードルが高いことなので、入り口としてはご家族の方とか、先生方からの問い合わせだったり、相談だったりというのを入り口にして、そこから何とか本人にお話を進めていただいて、何とか連れてきていただくみたいな形でスタートするケースがかなり多いかなというふうには思います。

とはいえ、そうやって周りの関係者の方が苦勞して連れてきてくださったとしても、われわれも頑張って何とか関係を継続していこうとカウンセリングを進めていくわけなんですけど、本人になかなか問題意識がないというところがあって、つながったとしてもすぐに切れてしまうということが結構あったりするということです。

どんな事例か、どんな感じでそういう事例が入ってくるかというと、こんな感じだったりするんですけど。架空事例ですけど、大学4年生A君について指導教員より相談があった。A君はこれまでに特に問題なく過ごしてきたんだけど、就職活動がうまくいかなかったことを契機に大学を休みがちになり、次第に全く出てこられなくなったと。こちらから本人へ連絡を入れても全く応答がなく、ご両親もどうしたらよいのかと大変困っている様子と。

またご両親からは、日中はほとんど自室でゲームをして過ごしていて、昼夜逆転気味の生活になっていると。自分の用事、ゲームを買いに行くとか、DVDを借りるみたいなこと以外は家を出ることはほとんどないと。またそんな状態に対して、本人はそれほど焦っ

たり不安に駆られたり様子もないと。周りばかり困って、親ばかり困っている。どうしたらいいんですかねというような話を伺っているというようなケースです。こんな感じの事例が出てくるわけです。

この学生さんの無気力とか意欲減退とかという状態をどうしたらいいのかなって話なんですが、一方で実は多かれ少なかれ、一時的にはどんな学生にも見られる現象とも言われていて、2007年度に日本学生支援機構のほうで、「大学における学生相談体制の充実方策について」という報告書が出ているんですが、その中で示されている図で、横軸が学年進行に伴う時間軸を指しています。縦軸が学生相談の領域と書いてありますが、要は学生さんの学生生活を構成する諸側面という言い方ができるかなと思います。

一番上が学業で、2番目に対人関係、学生生活というのがあって、一番下の青いところでは進路ということになっています。それぞれ、縦と横の軸に浮かんでる楕円があると思うんですが、それが、それぞれの心理的課題と呼ばれているもので、すべての学生さんが対象なんですけど、各学年においてそれぞれの側面ごとに、この時期にこれをクリアするべきという課題というんですかね。心理的にこれを乗り越えるべきという、そういうものがあるんだというふうに考えられているんですね。

これをクリアしたり、ないしは何とか折り合いをつけたりして、次の段階に進んでいって、学生さんたちはそれぞれ卒業に向けて成長していくんだというふうに言われています。それをクリアできたり、できなかったりという中で、学生さんが悩んだり苦しんだり困ったりしているというふうなお話なんです。

これを見ても、学業という欄の2年生から3年生あたりのところで、無気力、無関心、倦怠というふうになっています。つまり、想定としてすべての学生さんが一時的ではあるかもしれないけど、程度問題もあるかもしれませんが、いずれにしても何かしらの程度で、無気力、無関心、倦怠なる課題にぶち当たって、それを何とかそれぞれにクリアしていったという状況があるんだということを示してるんですね。一時的ではあれ、すべての学生さんが2年生から3年生ぐらいの時期にいったんぶつかる課題なんだという形です。

2年生、3年生、中間期というふうに言ったりしますが、大学生活の特徴として、大学生活への初期適応が終わって、将来の選択に向けて多様な経験を重ねる時期であると。生活上の変化は比較的緩やかになるというふうにあります。要は2年生、3年生ぐらいというのはいわゆる入学とか卒業とかという時期とは違うので、そういうスケールの大きな

何か課題にぶつかるといことはなく、比較的緩やかに過ごす時期ということになるわけです。

なので、逆に言えば、ゆっくり自分を振り返るといいますか、自分を見つめることができる時期という言い方もできるわけです。逆に言うと、自分を振り返ってる中で、今まで置いておいたさまざまないろんな課題に自分がぶち当たったり、そういうものが浮かび上がってくる中で、悩んだり苦しんだりスランプに陥ったりということが出てきやすい時期だというふうに言われています。

この時期に達成すべき心理的課題として、中だるみというふうに言われたりしますが、学業意欲が減退するとか、無気力、無関心とかスランプがあるってというようなことを越えて、自分がどういうところに関心があるのかということのを絞って行って、将来を見通していくということが必要な心理的課題になるだろうと。

それから、対人関係面で言えば、対人関係の深まりと広がりが起こってくる。部活、サークルの中では割とリーダー的な役割を取るようになっていたり、中心的な役割を取ったりということが出てくるので、そういうところでのリーダーシップの取り方であったりとか、新しい課題がまた出てくると。

進路的なところで言うと、将来の進路選択のための準備ということで、挫折経験の受け止めとありますが、先ほどの事例で言えば、まさしく就職活動をしている中で出てきた挫折経験ですね。挫折経験を受け止めるという心理的な課題に直面することで、その克服に向けてもがいているという見方もできるのかなと思います。ぱっと見は別に困ってるようには見えなかったとしても、心理的にはそういうふうにもがいているというふうな見方もできるのかなということです。

やっぱりこう考えてみると、さっきの話じゃないですけど、不登校イコール病気というのはちょっと違うのかなと。必ずしもイコールではないというところなんです。言い方の問題といえますか、生き方をこれから決めていく上でぶち当たるべき必要な壁という言い方もできるということです。成長していく過程で起こり得ることといえますか、その子なりの受け止め方があるんだというような視点を持ちながら、この子としては自分なりに殻をつくって、1回自分で考えているんだなど、そういうこともあり得るんだろうなどは思えます。

一方で、そんな不登校の学生さんに対して、じゃあ実際どんな対応をしていったらいいのかという問題もあるわけで、それを考える1つのヒントになるのがこれかなと思うんで



すが、これは引きこもりの話なんですけど、引きこもりからの回復過程ということで示されているものです。右上のところに価値ある生活というふうにあります。そもそも縦軸と横軸。縦軸が楽しい出来事がある、ないという軸で、横軸がつらい出来事がある、ないという軸です。

一番右上に価値ある生活と書いてありますが、人生というのは楽しいことばかりじゃなくて、つらいこともあつたりするわけですよ。楽しい出来事ももちろんあるんだけど、時々つらい出来事もありながら、それがスパイスみたいになって、楽しいことがより楽しく感じられたりとかというような部分もあるわけで、そういう楽しいこともあり、つらいこともあり、そんな人生を生きていくというところが価値ある生活とすることができるかなと思います。

普通は両方あるその生活を何とか自分なりにこなしていったるわけですよ。だけど、不登校になってしまうような学生さんのメンタルを考えると、しんどいことがあると回避しようとする性格というのが傾向としてあるわけですよ。そういう性格傾向があるとすると、逆にご自身の注意がよりつらいこと、つらいことにフォーカスされるんです。つまり、つらいことから自分を回避しなきゃいけないというのが自分にとって大事なことになるので、逆の言い方をすれば、つらいことに常にフォーカスするような、注意を向けていくような生活になってしまうんです。

そうすると、生活に対して楽しいことなんかないと。つらいことしかないというような認知しか、だんだんできなくなってくるわけです。そうすると、楽しい出来事なんか無い、つらい出来事しかないという否定的な感情を持つようになっていってしまいます。こんな否定的な感情を持つようになると、日常の世界、外の世界はつらいことだらけだというふうになってきて、結局、楽しいこともつらいことも無い状態に逃げ込もうとするんです。

つまり、無感情の世界へ。楽しいこともないけどつらいこともないという世界に、ここに逃げ込もうとするんです。これが引きこもりの現象だというふうに言われています。このとき、周囲の人は本人に頑張ってもらいたいので、いろいろはっぱをかけていくわけです。もうちょっと頑張れよとか、そんなことじゃ駄目だよとかというような形ではっぱをかけていく。つまり、それを頑張って乗り越えさせようとして、価値ある生活を取り戻させようとするわけですが、これは非常につらいわけです。性格傾向としてつらいことを避けるということがある人が、もう1回楽しいことがなくてつらいことがある社会にいきなり戻すというのは、とてもつらいことなんです。それができないからこっちに逃げ込んで

るんであって、周りが一生懸命はっぱをかけて何とかこっち向きにさせようとしても、結局また避ける。避ければますますはっぱをかける。そうすると、ますます逃げるという悪循環になるだけなんです。

なので、大事なのは、実は本人にとって負担のない形で価値ある生活を取り戻していくこと。どういうことかという、この図で言えば、こっち回りでこっちにもう1回回復させるのではなくて、逆回転。こっち回りで価値ある生活を取り戻す。つまり、いったんつらい出来事はなくて、楽しい出来事だけがある状態をつくって、そこで満たされることで初めてこっちにチャレンジする勇気が出てくるということです。

本人の中でできることを重ねていって、自分はできるんだと。社会でちゃんとやっていると、自分の中でできるような感情が自分の中に生まれて、初めて価値ある生活にチャレンジすることがまたできるようになるという考え方なんです。こっち回転で行ければそれはそれで立派なことかもしれないけど、現実的にとても難しくて無理なことなので、これは支援者のほうも疲労してしまいます。なので、まずはご本人が肯定的感情を持てるように、社会に対して肯定的な感情を持てるように。つまり、つらい出来事はないけれども、楽しい出来事があるという、そういうものとして社会を受け止められるようになって、初めてこっちにチャレンジできるようになると、そういう考え方です。楽しいけれどつらくないという肯定的な感情にまず満たさせる必要があるんだというお話です。

こうやって考えていくと、いろんなことが割と対策を立てやすいなというふうに思うんです。不登校学生によくみられる特徴ということで、まとめました。対人関係の持ち方が不器用、または未熟というところがあり、人の顔色ばかりうかがって、自分の思いとか感情をあまり外に出せないというタイプがいたりとか、あるいは真逆で、他人の気持ちへの配慮が全然できないというような子がいたりします。同世代とのかかわりがうまくできなかったりとか、集団行動が苦手とか、そういうような子がいたりするわけです。

背景に、高校までの生活の中で既に不登校経験があったりとか、あるいはいじめられた経験があったりとか、そういうものが実は影響してる可能性もあつたりします。つまり、人に対する不信感みたいなものがものすごく強くて、それがぬぐいきれないみたいなところがあるんですね。そういうことだと、対人関係の中でちょっとしたつまづきがあるだけでも撤退するみたいなことが起こり得るので、そういうところでセンシティブになってるところがあるなということです。

自尊感情が低いというのを次に挙げていますが、やはりベースの自尊感情が低い。先ほ

どの不登校経験、いじめられ経験というのが背景にある場合もありますが、ベースの自尊心が低いというところがあるので、うまくいかないということです。

それから、不本意入学というのを3つ目に挙げてますけれども、初めからあまり勉強とか卒業に対するモチベーションがないという子もいたりします。不本意入学だと、あまり気持ちが前向きになれないと言う子もいるんですね。いや、第一志望でしたよという子も結構いるんですけど、よくよく聞いてみると、周囲の期待、実家から通えるところとか、国立大学に行ってほしいとか、そういう期待を何となく自分に取り込んでいて、最初から自分の希望がどうというのを考えることを押さえ込んでたような子もいて、見掛け上、第一志望で来ているんだけど、結果的には周りの意見の中で決められた第一志望だったりすると、潜在的な不本意入学みたいな子も実はいたりするかなと思います。

それから保護者の過剰な期待、無関心ということで、過剰な期待ということがあれば、親の期待に応えようと自分を押さえていくわけです。自分を押さえてきた子は、今度、不登校という行動の形でもって親に反抗していこうとする子が出てきたりもします。とすると、そういう文脈を理解してあげないと、ますます親は子にプレッシャーをかけるわけです。何で学校行かないんだと。そうするとますます、その子は学校に行かないという悪循環が起こってくるということがありますし、あるいは真逆で、全く子どもに関心を持たないという親御さんだとすると、不登校という形で関心を向けてもらおうとする場合もあります。これもこういう文脈で理解してあげないと、親御さんはますます子供に対応することが面倒くさくなって突き放していくので、悪循環が続くということが起こり得ます。結局、共通点としては親子のコミュニケーションがうまくいってないということなんですけど、そういうことが起こり得るということです。

あと、学業不振ですね。理系の学部とか学科だったりすると、推薦で入ってきた子なんかはかなりスタートの時点で学力が違っていたりするので、しかも推薦で入ってきた子ってできるという意識のもとに来てるので、かなりプライドも高かったりするので、なかなか周りに相談できずに、自分が勉強についていけないことを相談できずに、知らないうちに気がいたら撤退していったというようなことがあったりもします。あまり社会科学系のほうでは、起こり得ないのかもしれないですけど、割と理系なんかではよくあるパターンだったりします。

発見の手掛かりということですが、入学初期から見られる遅刻や欠席ということで、これも不本意入学との絡みで、オリエンテーションからもう既に来ないなんていう子もいた

ります。不本意入学だと大学に対してのコミットメントが低いといえますか、大学に出てこようという意思が最初からないという子もいたりします。

生活リズムの乱れとその原因となる課外活動。朝きちんと起きるとか、夜きちんと寝るとか、食事を3回きちんと定期の時間にとるとか、実は単純なことなただけでも、1度崩し始めるとなかなか立て直すのが困難なんですね。気持ちを立て直すのがかなり難しいところなので、そういうところの乱れから学校へ出てくるのが現実的にできなくなるということが起こり得ます。

一方で寝れないとか、あるいは起きられないとか、食べられないという現象の背景にいろんな精神疾患がある可能性もあつたりするので、ちょっとここは慎重に考える必要もあるかなというところです。

それから、約束が守れないという規範意識の薄さと言うんですけど、面談の約束を守らないとか、提出物を期限までに出さないとか、メールに返事がないとか、そういうことができないということがあります。約束を守るというのはよく考えたら、期日に合わせて自分の行動をきちんと管理するというか、自分の予定をきちんと立てて合わせていくというか、そういう能力が必要なことなので、例えば発達障害をお持ちの方なんかは、かなりその辺は重いかなというふうに思います。そもそも、そうやってきちんと自分の行動をコントロールするというところで、意識といえますか、能力が伴わないという場合もあつたりします。

進路変更を理由とした休退学の訴えというのも、休退学そのものが問題だとはもちろん思わないんですが、休退学をしている、進路再考みたいな理由で休退学を訴えてきている背景に、いろいろ突っ込まれるのが面倒くさいから、適当に取りあえず進路変更とか進路再考と書いて休退学しようとしているという子がいて、いろいろ話を聞いてみると、かなり複雑な背景があつたりとか、悩んでることがあつたりとかするんですが、いろいろ突っ込まれるのが嫌だから、さらっとそういう理由を書いて休退学しようとするという子がいたりします。あと、欠席が多いということです。この辺が発見する1つの手掛かりになるかなというふうに思います。

次に対応のポイントなんですけど、特に先ほど取り上げた無気力、意欲減退の学生に対してというところを意識すると、とにかく関係性を維持していきましょうということです。会話の機会を持ち続けるとか、顔を出させるとかですね。とにかく挨拶だけは来させるとか、短時間でもいいので何とかつながりを維持しよう。直接に、リアルにやり取りでき

る関係性を維持しようというのが1つあるかと思います。

対応中にわき起こってくるイライラとか虚しさ、これは逆転移感情なんて言ったりしますが、客観的にとらえるということですね。いろんなことを話しても他人事だったりするし、なかなか切迫感が感じられないということがあったりするので、対応してるこちらがやりきれない気持ちになったり、怒りがこみ上げてきたり、イライラしたりということが起こり得ます。ただ、逆の立場といいますか、本人からすると、そういう身の守り方をせざるを得ない状況なのかもしれない。直面できないことなので、そういう形で直面しないというところしか自分の身の守り方を知らないのかもしれないというところがあるので、少し客観的な位置で理解していただくとありがたいかなというふうに思います。

保護者には、指示を減らして様子を聞いてあげること増やすように助言するということで。保護者の方から相談を先生方が受けるという場面もあったりするかなと思うんですが、結構お話聞いていただくと、あれしろ、これしろとか、何で学校へ行かないんだとか、かなり厳しくしておられるという保護者の方もおられるんですが、先ほどの話で、まずきちんと保護者と本人との間でお話ができる状況がないと、いきなり不登校をどうするとか、学校へ行けとかっていう話が通ずるはずがないんですよね。

日常的なコミュニケーションが既に失われている状態の中で、いきなり不登校の話とか進路の話とか、それだけが通るはずがないので、まずは本人が何を思ってるのかって様子を聞いてあげるとか、話ができない状況なのであれば、日常的な接触を、会話するだけじゃなくてもちょっと声をかけてあげるとか、振り向きざまに肩をぽんぽんたたいてあげるとか、そんなレベルのことでいいので、日常的な接触を少しずつ可能な範囲で増やして行って、それから日常的な会話ができるような関係になってから初めて不登校の話、進路の話ができるようになっていくということがあるので、いきなり何で学校行かないんだみたいな話をしてもうまくいかないというところを理解していただくといいかなというふうに思います。

それから、安心して自分の欲求や感情を表現できる場の提供ということで、なかなか先生方のほうでご対応いただくのは難しいところかもしれないんですが、ある程度、1対1の関係性を取り戻すということができたら、今度は学生さんなんかを含めた1対多の関係性をその次の段階で取り戻していくということで、失敗できる関係性というんですかね。評価からちょっと離れた関係性みたいなところの中で、少しずつ自分のペースを取り戻していくことができるようになるかなと思うので、そういう自分の気持ちとか思いと

かというのを表現できるような場をうまくつくってあげるようにすることが必要なのかと思います。

その2ですけど、気になる学生については日ごろから注意しておくということで、先ほどポイントを挙げさせていただきました学生さんなんかについては、大丈夫かなということを日ごろから見ていただけるとありがたいなと思います。本人と接触できない状況であれば、保護者への連絡についても積極的に検討するということで、保護者に連絡するというのを躊躇される先生方もおられるかなと思うんですが、ただ、必修授業だけどころかなり欠席が続いてるとか、ゼミに全く顔を出さなくなったというような学生さんに関しては、何かしら早めに対応していく必要があるかなというふうに思うんです。

怖いのは、最近の保護者さんは学校はちゃんと対応してくれると思ってるので、学校に出てきてないということを学校側が知っていたにもかかわらず、何も対応していなかったという状況に関して、かなりクレームを入れてこられる可能性があったりするんです。そうすると、少なくとも学校側としてはここまでの対応はしてたと、ここまでは検討してたというようなことを説明できる状況をつくっておくのが大事かなというふうに思いますので、必ずしも責任の問題だけではないんですが、1つの考え方としては、ある程度学校に來れてない状態を心配していたから、少し様子いかがですかねというようなことを保護者さんとやり取りするということがあってもいいのかなというふうに思ったりします。

一方で本人と連絡が取れる、学校に來れてないけど、ある程度本人と連絡が取れてるとか、あるいは保護者さんもある程度事情を把握していて、見守ってくれてるとか、そういうようなケースであれば、ちょっと様子を見てみるということがあってもいいのかなと思います。これも先ほど説明しました、少し自分を見つめ直す時間みたいなことが必要なケースもあったりするので、ある程度本人の状況がこっちも分かっていると、保護者さんもある程度状況を把握してくれているとか、そういうことであれば見守ってみるという手もあるかなというふうに思います。

実現可能な目標をスモールステップで提示するということがなんですけど、結構引きこもってる方とか、不登校の方って、一発逆転を狙ってくるんですね。久しぶりに学校出てきて、今後の話をしてる中で、本当にできるのかって言うと、頑張りますと。明日から休まずに全部授業出ますとかって言うんですけど、できっこないって言うと失礼ですけど、大概できないですよ。今までのことを全部取り戻そうと思って、一発逆転を狙ってくる方って結構おられるので、それができないってなると、ますます不登校という状況に陥って

いくので、実現可能なところでお話ししていくというのが大事かなと思います。

実現可能というのも、ちょっと頑張ったらできる目標みたいところをうまく立てようとするんですけど、実はそれもまだ段階としては早くて、まずは頑張らなくてもできること、既にできてること、頑張らなくてもできることみたいなことをまず維持してもらって、それがある程度維持できるという状況が分かってきたら、ちょっと頑張ったらそれができることというのを入れて。つまり、既にできていることの維持、頑張らなくてもできること、ちょっと頑張ったらできることみたいなことの順番で、スモールステップで目標を組み立てていってあげるのが大事かなと思います。

ちょっと頑張らないとできないことだと、やっぱりちょっと頑張らないといけないので、かなり抵抗があるんですね。だから、頑張らなくても既にできてることの維持から始めるというのが大事かなというふうに思います。既にできてることなんてないんじゃないかとか、あるいは本人の話の中でも既にできてることなんてないですというふうに出てくることが多いんですが、そこは頑張って探してあげるといことですね。お話ししてる中で、そんな状況だけれども、こういうことはできているじゃないというようなことをうまく探してあげるといことが姿勢として大事なのかなと思います。

資料に精神疾患の可能性を把握し、必要に応じて保健管理センターを勧めると書いてありますけど、不安感、不眠感、食欲の変化と挙げてますが、状況にそぐわないような過剰な不安を抱えておられたりとか、かなりエネルギーが枯渇しているとか、抑うつ感を伴ってるとか、あるいは寝れない、起きれないの問題があったり、食欲が低下してるとかというようなことがある場合は、精神疾患を考える1つのポイントになってくるかなと思うので、そういう場合だと、もちろん相談室のほうにご相談いただいても結構なんですが、保健管理センターさんのほうにお話を進めていくというのも1つの手かなと思います。本人にある程度、来談意欲があれば、相談室の利用を勧めただけであれば、複数の関係者で支えるということができるので、またご紹介いただければありがたいかなというふうに思います。

アンケート結果からというところになりますけど、先ほどの2011年度に行った全学の調査の1つの結果なんですけど、担当学生とコンタクトを取る手段として、使うものについて教えてくださいというような項目で、こういう回答、複数回答でここへ書いていただいたんですけど、太字になっているのが人文学部さんの先生方の回答で、括弧書きになっているのが全学の回答ということになります。ちなみに当時のデータで人文学部さんの有効回答者

数は46人の先生方にご対応いただいて、配布数に対する回収率としては59%いただいているということになって、ほかの学部さんはもっと低かったりもするので、そういう意味ではありがたいなと思いますが、これを見ると、学生本人に電話を入れるとか、当該学生の保護者に連絡を入れるとか、このあたりが1つ判断の迷いどころになるのかなというふうには想像されると思います。

ちなみに、こちらからはコンタクトを取らないなんていう先生もおられて、別にどんなお考えがあっても、それはそれで先生方のお考え次第だとは思いますが、できれば何かしらアクションを起こしていただくと、ありがたいなというような気はします。

そんなところで、いかに直接のコンタクトですね、保護者さんなり、学生さんなり、直接のコンタクトを取るかというところで迷われている先生方は多いのかなと思うので、どういった場合にどんなふうに保護者とコンタクトするのかとか、あるいはそれに絡めてどんなふうに相談室にサポートをご利用いただくかというふうなところを、フローチャートでまとめてみました。概念的なものではありますが、ご参考にいただければと思います。

まずは先生方のほうで現状の把握、情報収集をしていただいて、実際来てないなということがあれば、学生さんを何らかの形で呼び出していただければと思います。その呼び出しに学生が応じるようであれば、学生さんと接触していただいて、面談していただければと思いますけれども、本人と接触が困難な場合ということが出てくると、すぐさまということではないかもしれませんが、本人と連絡が取れない以上は、次の手段としては保護者さんとの連絡を取るということをご検討いただけるといいかなと思います。

保護者さんに連絡を取って、保護者さんに依頼をして、学生さん本人の状況をちょっと確認していただけたらということで、保護者さんによる本人への接触状況確認というのをしていただいて、その結果を踏まえてだったり、あるいはどう対応していいかわからないからということで、保護者さんのほうが面談を希望するということがあったりします。その場合には、保護者の方との面談を先生方にもお願いすることになるのかなと思うのですが。一方で、その話題の中で保護者さんがカウンセラーとの相談を希望いただけるのであれば、相談室のほうにご紹介いただければ、私どものほうで相談を受けることもできるかなと思いますし、一方で保護者さんと面談するときに、どういうことを確認したらいいとか、どういう話をしたらいいかということで、何かしら私どものほうと相談いただくことで、何かヒントを得ていただける可能性はあるかなと思うので、もしそのようなこ



とがあれば、また先生方のほうで相談室にお問い合わせいただければと思います。

もちろんご希望いただけるようであれば、カウンセラーがその場に同席させていただくということもできるかと思ひますし、相談室の面談室のほうを使っただいて、私を含めた三者面談のような形で、保護者の方と相談するなんていうこともできるかなと思ひます。

実際、いずれにしても、どれかの形で学生本人からいろいろな情報を取りたいんですが、その中で確認したいこととしては、例えば現状の生活ですね。どんなふうに1日過ごしているのかとか、食事の様子、睡眠の様子なんかを確認するとか、あるいは大学に来られなくなったきっかけとか、理由とか。これはあくまで本人がどういうふうに語るかというところが大事なところで、それが本当のきっかけとか本当の理由というふうに考えすぎる必要はないと思うんですが、少なくとも本人がどう考えてるかということです。

今後について、要は進路的なこと、学業的なことを含めて、今後について考えていることがあればどうかというようなことを聞けるといいかなと思ひます。ただ、無理強いしてまで聞き出すべきことではなくて、直接にコンタクトできているということが大事なことだと思うので、本人が語れる範囲で臨機応変に対応する必要があるだろうなというふうには思っています。そういうやり取りの中で心理的なケアが必要だということであれば、学生さんご本人を相談室のほうにまたご紹介いただければ、対応させていただけるかなというふうに思ひます。

比較的改善しやすいケースの特徴ということで挙げさせていただきましたが、取り上げるまでもないかもしれないですけど、本人の解決へのモチベーションが高かったり、あるいは心理的な、情緒的なかわり方ですね、心の触れ合いなんて書きましたけど、そういうやり取りができる子、あるいは、ある程度の社会性、対人スキルが備わっている子、それから学部、研究室において適切な受け入れ体制が準備できるような子、こういう子であれば、ある程度回復を見込めるかなというふうに思ひます。

いずれも学生の持つ特性次第ではあるんですが、一方で教員・学生間の日常的な関係性のあり方も問われているというところで、事前にいただいたご質問の中で、どのようにかかわればいいのかとか、どの程度やり取りしたらいいとか、どのぐらいの頻度でやり取りしたらいいかというようなご質問をいただいていたんですが、総じてケース・バイ・ケースかなというふうにも思ひますね。ケース・バイ・ケースとはいえ、ケース・バイ・ケースを判断する基準、前提みたいなものがあるかなと思ひたときに、事前にその学生さんと

の間でどの程度親しい関係性を持っていたかというのは、かなり重要なポイントかなと思います。親しい関係性がある程度持っていたということであれば、先生方のほうで少し介入していただくことがすごく効果的なものになるかなと思うんですけど、一方であまり関係性が持てない子だったということであれば、先生方のかかわり方とか、伝え方によってはそれがプレッシャーになってしまったりということが起こり得るのかなというふうに思うんです。

かといって、躊躇して何もしないというと、問題は未解決のままになってしまうということも一方ではあるかなと思うので、難しいところではあるんですが、ただ、関係性ということでは、学生さんがどうということだけじゃなくて、こちら側からどういうふうに関係性を持って接するかということも問われてる部分はあるかなと思いますので、日常的にやり取りできる関係性をいかに学生さんとの間で持っておくかというのが予防的な観点からすると、かなり重要なポイントになるのかなと思います。

実はこれ、ハラスメント対策という意味でも同じ考え方ができて、ちょっとハラスメントの話は今回のテーマとは違うかもしれませんが、どういうことをしたかというよりも、むしろ誰にされたかがハラスメントの中では問題になってたりするんですね。学生さんの受け止め方として、普段から親しい人から言われるのであれば別に気にならないのに、あの人から言われたからすごく嫌な気持ちになったみたいなのがあったりするんですね。

そう考えると、日常的に学生さんとの間でどのぐらいの関係性を持ってるかというのは、かなりポイントになるのかなと、学生対応する上ではポイントになるのかなというふうには思うところなので、ぜひ、予防的な観点から考えたときには、1度振り返っていただくとありがたいかなというふうに思います。

ちょっと駆け足でお話を続けてきたので、分かりづらい部分もあったかもしれませんが、一応用意した情報はここまでです。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

【司会】 鈴木先生、ありがとうございます。せっかくですのでご質問とかご意見などございましたら、この場でどなたかお持ちでしょうか。はい。お願いします。

【質問者1】 事前の質問はしなかったんですけど、フローチャートとかを拝見して思い出したことがあるんですけど、最後から2つ目のフローチャートで、本人との接触が困難で、その後なんですけど、保護者への連絡、保護者との接触すら困難な場合が時々というか、割とある。恐らく、家庭環境に問題があるがゆえにこうなるのかなと予測されたときに、そのフローチャートで保護者がノーリアクションだった場合にどうするかというのがない

んですけれども、結構行き詰まってしまうのは、保護者とも連絡が取れない、あるいは放置してくださいとか、あるいはやりますとか何とかしますと言ったまま、なしのつぶてといった場合に、例えば授業料であるとか、そういうときに一番顕著なんですけれども、あとは履修関係の事務的な手続き、あるいは図書館の本を長年返却していないといった非常に、本人が来ないことによって、本人以外のところに影響及ぶような場合に、どこまで例えば督促をするのかというのを、保護者すら、ある意味で責任を取ってくれない場合にどうしたらいいのかって、何かお考えがありますかどうか。

【鈴木】 はい、ありがとうございます。確かにそういうケースもあるかなと思います。ただ、われわれでできることの範疇と考えた場合に、最終的にその学生さんの責任を取っていただくのは保護者さんということになりますし、保護者さんがそういう姿勢であるという以上、例えば親族、どこまで追っかけるかというふうにと考えると、なかなかわれわれのほうでやるのは難しい部分があるかなと思うんです。

ただ、どこまでの人に連絡ができるかというのは、もちろんケース・バイ・ケースであったり、あるいは学生さんとのやり取りの中で考えるとかということが出てくるのかなと思うんですけど、最終的にはやれる範囲の中で努力していくしかないという結論になってしまうのかなというふうには思います。そうですね、難しい問題ですけど、ごめんなさい、そんなことでよろしいですかね。

【質問者1】 すみません。もう1つ。最後の対応のポイントというところで、関係性というところで思い出したんですけど、長年不登校とかで留年を繰り返す学生が出てくると、対応してた教員の退職とか、そういう問題も出てきたりしまして、そこで関係性が切れてしまう。教員のほうも、私も実際には前の大学で長年留年してたゼミ生を置いてくる形でこっちに転任してしまって、気がかりですし、例えばこの大学を退職された先生が、その後、ちゃんと彼は卒業しましたか、彼女は卒業しましたかって聞いてこられたり、気がかりにはなるんですけど、学生のほうもひょっとして、ああ、ゼミの先生いなくなっちゃったみたいな感じで、余計に不登校になるとかということがあると、ゼミの担当の先生だけに過剰に負担が行くというような形にならずに、情報が共有できるというのはいいなと思うんですけど、かといって、知らない学生のことをいきなり後の先生が託されたというのでも大変なので、その辺の関係性の継続というのが実際に難しい部分もあるんですけど、何か案というか、ご意見はないでしょうか。

【鈴木】 そうですね。その辺は難しいお話ですよ。ここに関係性と書かせていただい

たのは、あくまで予防的な観点という意味で、現状、関係性が取れる学生さんとは日常的に関係性を取っておいてください、そういうふうにしていただくと予防的な効果がありますよというイメージを挙げさせていただいたんですが、もし切れてしまっている学生さんということであれば、慎重にといいいますか、少しずつ、どうしたらつながれるかをいろいろ工夫しながら、何とかつながる方法を考えていくしかないかなと。

引き継ぎ的なことで言うと、やはり学科、学部というところも含めて、あるいはもうちょっと小さなユニットなのかもしれないですが、周りの先生方なんかにもある程度協力をいただきながら、情報の共有をしながら、お1人で抱えるというよりかは、何らかのユニットで抱えるような形で対処していくという必要も出てくるのかなというふうに考えたりはします。そんな単純にいかないというところなのかもしれませんが、そんなところでですね。ご回答になってましたかね。

【司会】 そのほかに何かご質問ありますでしょうか。はい、先生、お願いします。

【質問者2】 今のお話を伺っていて思ったんですけども、教員と学生の個対個の関係でできることというのはすごく限られてるんじゃないかと思ひまして、私が今まで教えてきた学生の中でも、ずっと出席できなくて再履修を繰り返して、結局単位が取れたのは、4年間で卒業しなくちゃとか、何かそういう内的な要因といいいますか、その人が変わるためのきっかけとして、もうちょっと仕組み的なものが工夫できないかなと思ったりするんですけど、そういうことの研究みたいなものは何かありますでしょうか。

【鈴木】 仕組みですか。

【質問者2】 制度というか。

【鈴木】 ある程度、単位がうまく取れてない学生さんとか、不登校になってる学生さんをスクリーニングして、そういう方に個別に対応していくみたいなのは確かにあるかなと思ひんですが。取りあえず、一番学生さんに近いところにかかわっていただいている先生の中で、本当に確におっしゃるとおり、限られてるとは思ひんですけど、限られてる中でもある程度、できる限りの関係性をつくっていただければ、結局、学生さんにとっては大学とのつながりって先生とのつながりみたいところがあるので、その中でできることをしていただきながら、外的な要因で確かに立ち直るときは立ち直るといひのはおっしゃるとおりで、4年生になるのを目の前にしてやる気スイッチが入って、がっと単位を集め出したということも起こり得るんですけど、それも結局ベースに、ある程度大学の中での関係性があって、初めて大学に戻ってこれるといひところが、まずベースとしてはあると

思うんですね。

直接的に何か効果を感じられないかもしれませんが、何かしら外的な要因のスイッチを入れる1つのベースになってるという言い方もできるかなと思います。なので、個々の学生さんにとって、大学イコール先生とのつながりというところがあるので、必ずしも仲良く、日常的にわいわい騒いでおけとか、そういうことでは全然ないんですけど、何かしら先生方、いろんな持ち味をお持ちでいらっしゃると思うんですが、先生方なりにつないでいる関係性というのを意識していただけるとありがたいかなと、そんなようなお話ですね。

【司会】 そろそろ時間になりましたけども、どなたかどうしても質問したいという方は、はい、どうぞ。

【質問者3】 参考になる話ではあったんですけど、教員の特性というのもあると思うんですね。こういう話題が降ってきて、率直に言って、ああ、面倒くせえなというふうに思うのは教員失格なんですか。(笑)

【鈴木】 決して、失格ではないと。正直なお話だと思います。非常にかかわるのが面倒くさい学生さんが多いです。結局、本人は困ってないのに、周りばかり困らせてて、イライラさせられるわけですね。おまえのためにやってるのにとか、おまえのためにこういう場を設けてるというわけで、それは面倒くさいと思われて全く当然のことだと思うんです。

【質問者3】 途中で、教員が対応しなくちゃいけないというふうな話で、例えば保護者に連絡って、僕は取ったことないんですけども、保護者に連絡しないと後で何かクレームがつくとか、脅しみたいに聞こえて、精神的圧迫を感じたり。

【鈴木】 失礼しました。

【質問者3】 やっぱり教員次第というところは、教員のそれぞれの特性で、教員ももちろん心理的な問題を抱えてる人もいます。私は自分が精神疾患だと思ってないんですけども、不登校になる素地みたいなものは自分にあると思っていて、不登校の学生に対して共感を覚えたりはするんですね。だから、できることからやっていこうよみたいな、そういう軽薄なことは言えないっていう感じはあって、なかなか対応しづらいなと思うんですけど。

【鈴木】 先生のお考え、とてもよく私も分かるなというふうに思います。なので、先生方ご自身の価値観だったりお考えだったり、それぞれあっていいと思うんです。ただ、目

の前で学校に行けずに困ってる状態があるってなったときに、どう対応したらいいかというときに、ご自身の持たれているいろんな選択肢でなかなかうまくいかないということがあれば、相談室のほうで一緒に相談いただければ、対応を一緒に考えて、よりよい策をつくっていくという可能性はあるかなと思いますので、変な話、今日のお話を全部意味のないものと投げ捨てていただいても全然構わないので、個々の対応の中で先生方が何かお感じになられたり、うまくいかないなということがあれば、個別のケースの対応という意味で相談室にご相談いただければ、一緒に考えられるかなと思います。そのときはまたお話を聞かせていただければと思います。

【司会】 よろしいでしょうか。本日は不登校学生への対応ということで、貴重なお話をいただきました。具体的な対応策とか、日々の関係性である程度の予防もできるのかなというふうなことがあったのかなと思います。本日は貴重なお時間を割いていただきまして、どうもありがとうございます。もう1度、鈴木先生に拍手をお願いします。(拍手)

## 2. 講演会配布資料

1

平成29年度 人文学部FD講演会  
不登校学生等の対応について

三重大学学生総合支援センター  
(学生なんでも相談室)  
講師 鈴木英一郎

2

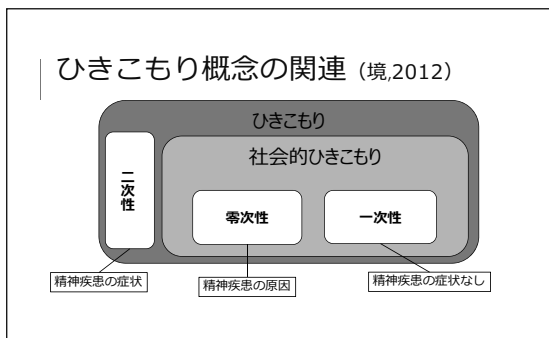
### アンケート結果から

困難学生への対応経験について

- \* 学力不振・学力低下の学生の対応経験あり …… 73%
- \* 不登校の学生の対応経験あり …… 82%
- \* 「うつ病」などの精神疾患を持つ学生の対応経験あり …… 80%

⇒多くの先生方が、困難な学生の対応の経験を持っている。

3



4

### ひきこもりの三分類と支援のストラテジー (厚生労働省,2010)

第一群	統合失調症、気分障害、不安障害などを主訴とするひきこもりで、薬物療法などの生物学的治療が不可欠ないしはその有効性が期待されるもので、精神療法的アプローチや福祉的な生活・就労支援などの心理・社会的支援も同時に実施される。
第二群	広汎性発達障害や知的障害などの発達障害を主訴とするひきこもりで、発達特性に応じた精神療法的アプローチや生活・就労支援が中心となるもので、薬物療法は発達障害自体を対象とする場合と、二次障害を対象として行われる場合がある。
第三群	パーソナリティ障害(ないしその傾向)や身体表現性障害、同一性の問題などを主訴とするひきこもりで、精神療法的アプローチや生活・就労支援が中心となるもので、薬物療法は付加的に行われる場合がある。

5

### 大学生の不登校

大学生の不登校

- ① 3ヶ月以上登校して(講義に出て)いない。
- ② 身体的病気になるいは重篤な精神的な病気が無い。
- ③ 家庭にも大学にも登校を妨げる理由が無い。(小柳,1996)

→男性1.16%、女性0.58%、計0.9%が該当  
(回収率から推定される実際の割合……1.2~2.0%)  
→本学に相当する調査データはないが、そのまま当てはめれば、100人前後存在する可能性。

6

### 当相談室における不登校学生への対応

◎平成25~27年度における「不登校」を主訴とする問題(とその対応)に関する新規相談申込み(問い合わせ)件数

	学生本人	教職員	保護者	計
平成25年度	7	3	7	17
平成26年度	9	4	9	22
平成27年度	14	12	10	36

→年々増加傾向。  
→半分以上のケースは、教職員や保護者からの相談(問い合わせ)。

7

### 大学生の不登校

「大学生の不登校」のタイプ

①「**非行・怠学傾向**」としての不登校

- ・大学生にはあまり多くない（むしろ小・中・高校で多い）。
- ・きちんとした規律をきっぱりと伝える。

②「**積極的なモラトリアム**」としての不登校

- ・大学や学業以外に活動の場を持っていて、そこでの生活にやりがいを持っているような場合
- ・性質をよく検討した上で、認めてあげることも。

8

### 大学に来られない学生

「大学生の不登校」のタイプ

③いわゆる「**登校拒否**」としての不登校

- ・神経症（ノイローゼ）的状态。本人も「行かなくてはいけない」という思いながらも、身体が言うことを聞かない、といった状態。
- ・過剰適応気味の傾向。カウンセリングには乗りやすい。
- ・生活環境（家族関係、友人関係、教職員との関係等）の調整が必要な場合もある。

9

### 大学に来られない学生

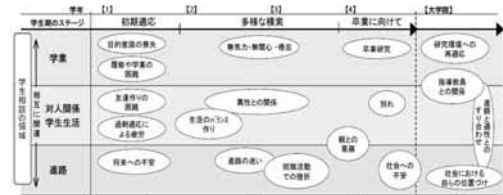
「大学生の不登校」のタイプ

④「**無気力**」としての不登校（スチューデントアパシー）

- ・ゲームやPC等に熱中し、社会的な繋がりを持とうとしない。
- ・本人に「なんとかしなければ」という姿勢が乏しい。
- ・本人よりも周りが困惑してしまう。
- ・自発来談に至ることは極めて稀。周囲の働きかけが重要。
- ・一方で、一度関係が繋がったとしても、すぐに切れてしまいがち。

10

### 学生の「無気力」「意欲減退」



日本学生支援機構（2007）  
「大学における学生相談体制の充実方策について」 P8

11

### 学生の「無気力」「意欲減退」

2～3年生（中間期）の大学生活の特徴

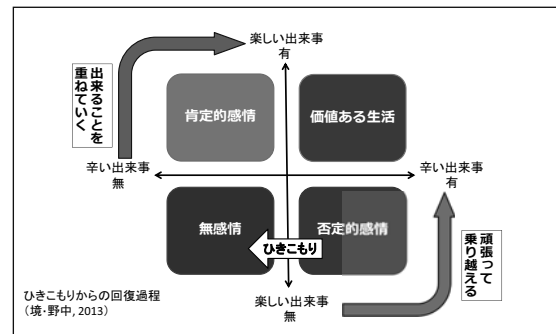
大学生活への初期適応が終わり、将来の選択に向け、多様な体験を重ねる時期（生活上の変化は比較的緩やかになる）。



◎この時期に達成するべき“心理的課題”

- \* 中だるみ（学業意欲減退、無気力・無関心、スランプ）を超えて関心の的を絞る。
- \* 対人関係の深まりと広がり（リーダーシップの取り方）。
- \* 将来の進路選択のための準備（挫折経験の受け止め）。

12



ひきこもりからの回復過程  
（境・野中、2013）



13

### 不登校学生によく見られる特徴

- \* 対人関係の持ち方が不器用、または未熟
- \* 自尊感情が低い
- \* 不本意入学
- \* 保護者の過剰な期待、または無関心
- \* 学業不振



14

### 発見の手がかり（予防的対応）

- \* 入学初期から見られる遅刻や欠席
- \* 生活リズムの乱れとその原因となる課外活動（深夜のアルバイト、土日も目一杯の部活動など）
- \* 約束が守れない（規範意識の薄さ）
- \* 進路変更を理由とした休退学の訴え
- \* 欠席過多



15

### 対応のポイント①

特に「無気力」「意欲減退」の学生に対しては…

- \* とにかく関係性を維持する。  
(会話の機会を持ち続ける、顔を出させる)
- \* 対応中に湧き起こってくる“イライラ”や“むなしさ”（逆転移感情）を客観的に捉える。
- \* 保護者には「指示を減らして様子を聞いてあげること増やす」ように助言する。
- \* 安心して自分の欲求や感情を表現できる場（仲間）の提供。  
(「1対1」から「1対他」への安全なステップアップ)

※岩村(1996)を参照

16

### 対応のポイント②

- \* 「気になる学生」については日頃から注意しておく。
- \* 本人と接触できない状況であれば、保護者への連絡についても積極的に検討する。
- \* 本人と連絡が取れる（または保護者も事情を把握している）ようなケースであれば、少し見守ってみる。  
(自分を見つめ直す時間として尊重する)
- \* 「実現可能な目標」をスモールステップで提示する。
- \* 精神疾患の可能性（不安感、不眠感、食欲の変化など）を把握し、必要に応じて保健管理センター（外部医療機関）を勧める。
- \* 本人に相談意欲が見られれば、相談室の利用を勧める。

17

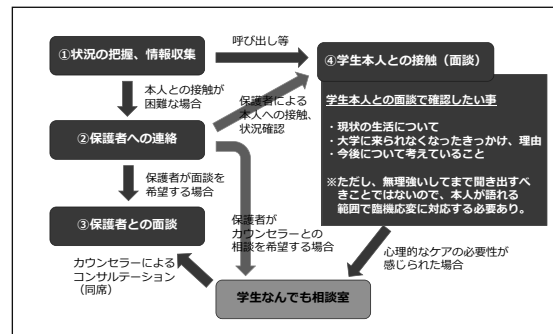
### アンケート結果から

担当学生とコンタクトを取る手段について（複数回答可）

- \* 学生本人にメールを入れる・・・91.3% (80.8%)
- \* 授業やゼミなどで直接声をかける・・・91.3% (85.4%)
- \* 当該学生の友人に伝言を依頼する・・・52.2% (60.5%)
- \* 学生本人に電話を入れる・・・50.0% (57.1%)
- \* 当該学生の保護者に連絡する・・・21.7% (28.0%)
- \* 学生本人の自宅（下宿）を訪問する・・・0.0% (6.9%)
- \* ごちからはコンタクトを取らない・・・4.3% (2.3%)
- \* その他・・・MoodleやMLの利用、手紙を書く、机上にメモを残す、他の教員や学務の方に連絡を依頼する、など



18



### 対応のポイント

#### (比較的) 改善しやすいケースの特徴

- ・本人の解決へのモチベーションが高い。
- ・心理的、情緒的な関わり方（こころの触れ合い）ができる。
- ・ある程度の社会性、対人スキルが備わっている。
- ・学部や研究室において、適切な受け入れ態勢が準備できる（環境の整備）。

→「学生のもつ特性次第」ではあるが、一方で、**教員—学生間の日常的な“関係性”**のあり方も問われている。



### 3. 講演会のアンケート結果

回答者数：36名

#### 質問1. 今回の講演会の内容について、良かったと思いますか？

大変良かった	: 30%
良かった	: 50%
普通	: 14%
あまり良くなかった	: 3%
良くなかった	: 0%
その他	: 3%

#### 質問2. これまでに学生の不登校等の困難事例に直面したことはありますか？

ある	: 83%
ない	: 17%

#### 質問3. 今回の講演会で有益だった点、改善した方が良い点があればお書きください。

- ・不登校学生への対応の仕方が具体的にわかった点が有益だった。
- ・ある程度、具体的な方法が示されていた点がよかったです。
- ・学生への対応法についてよくわかった。
- ・不登校学生に対する対応のポイントがわかった点が有益だった。
- ・実現可能な目標をスモールステップで提示するという方法を学んだことが有益でした。
- ・学生との接し方（ケースバイケースの対応）等、とても参考になりました。
- ・大学教員として不登校学生を指導することもあるので、現状や対策の考え方がわかった。
- ・不登校学生を大きな図の中で見ることができた。
- ・様々なパターンの学生の立場から、不登校問題をみつめることができた。特にそのパターンにおける学生の心の動きをお話いただき勉強になった。
- ・過剰適応気味の学生を持ったことがあるので、参考になりました。
- ・学生と教員の日常的な関係の重要性についてよく理解できました。
- ・やはり普段からの関係が予防も含め有効であるということが再確認できてよかった。
- ・数々の指摘が、現実のゼミ生に当てはまるように思える。
- ・困ったときに、何でも相談室の方が、同席して下さることがわかってよかったです。

・一般的なお話だけでなく、本学での事例や具体的な対応、考え得る対応で困難である場合の対応（問題提起）など、本学の全体的な取り組みについて情報共有する時間があるとなお良かったと思います。

- ・もう少し、具体的なケースについて、取り上げていただいてもよかったかなと思いました。
- ・事例をもう少し紹介いただけると有難かったです。
- ・もう少し具体例の紹介をしていただきたいと思いました。
- ・具体的な事例紹介があるとよい。
- ・より具体的な例が多ければよかったですと思います。
- ・個々の教員の努力では限界あり。
- ・具体的な相談先（相談室）の連絡先を知りたい。
- ・質疑の時間にももう少し余裕がほしい。

**質問4. 今後、FD講演会で取り上げてもらいたいトピックがありましたら、お書きください。**

- ・学生の就活と就職支援
- ・就職指導をすることも多く、ここ2、3年の企業の求める大学生の必要な資質などを伺いたい。教育にも役立てたい。（三重県下の大企業の人事担当者などを呼んで）
- ・学生のインターンシップの実態とそれに対して教員がなすべきこと。
- ・留学生へのケア、留学生の成績評価
- ・留学生対応
- ・大学院のカリキュラム等について、教員間で話し合える場を作っていただければ幸いです。
- ・学生の初年次教育についての情報共有。スタセミ（全学）、情報科学基礎が具体的にどのようなペースでどのように教えられているのか。年度ごとの学生の変化と課題の共有。

## IV. 学部生による 「授業改善のためのアンケート」

## IV. 学部生による「授業改善のためのアンケート」

### 1. アンケートの概要

#### ① 授業評価実施の目的と方法

人文学部学生による「授業改善のためのアンケート」を授業評価として行う目的は、講義・演習に関する基本データ・資料を蓄積するための仕組みに基づき、教育内容やその教授方法の改善のための議論を支援するための資料を提供することにある。授業評価で得られた分析結果は、各担当教員が授業を改善していく際の貴重な情報源として用いると同時に、定例FD研修会において議論を行う際の資料としても活用することとし、それによって個々の教員による授業内容の改善のみならずカリキュラム全体の教育効果を高めることを目指している。

授業評価の実施にあたっては、基本的に従来の方針をできる限り踏襲することで資料の継続性を維持し、また、学生の自由な意見表明の機会を確保することに努めた。2017年度は、紙媒体によるアンケートが廃止され、前期はWEB入力にはUNIPAを使うという新方式に、後期はUNIPAに加えてスマートフォンからの入力も可能になるという変化の年であった。スマホ対応のアンケートにより、授業中にアンケートを行うことが可能になり、回答率の増加につながった。調査内容は、全学的に2010年度より使用しているアンケート用紙を踏襲しており、片面は「学びの振り返りシート」、もう片面が「授業改善のためのアンケート」である。

分析にあたっては、主として前者のうち「II. あなたの学びに関する項目」、および後者について行う。なお、「4つの力に関する項目」は学生自身の振り返りのためのものであるが、参考として用いる。

#### ② 質問項目(巻末資料1)

巻末資料1にあるように、「学びの振り返りシート」はI.「管理項目」、II.「あなたの学びに関する項目」、III.「4つの力に関する項目①」、IV.「4つの力に関する項目②」からなり、「授業改善のためのアンケート」は、V.「教育改善の項目」、VI.「学部付加項目／教員付加項目」、VII.「授業改善に関する記述欄」からなる。このうちV.「教育改善の項目」は、学生の視点から「授業をもっとよくするため」の改善項目を項目リストから選択することになっている。VI.「学部付加項目／教員付加項目」は、それぞれ各学部・各教員単位で設問を追加することが可能なカテゴリである。今年度「学部付加項目」は特に設定しなかった。VII.「授業改善に関する記述欄」は、「先生に続けてほしいと思うこと」「自分が先生だったらこうしたいと思うこと」をそれぞれ自由に記述する項目となっている。また、この記述欄に関しては、学部から指定がある場合はそれに従うことになっているが、今年度は指定しなかった。

### ③ 調査対象科目

全学統一の授業評価となっても、評価の対象となる授業科目の選択は学部の判断にゆだねられている。人文学部における対象授業の選定方針として、基本的に通常の講義科目はすべて対象とした。なお、昨年度までの方針を参考に、選定方針の細目として以下のような点を掲げた。①専任教員および特任教員の担当する科目は原則として実施対象とするが、非常勤科目は実施しない。それゆえ、集中講義についても実施しない。②語学関係科目・演習科目は実施対象としない。③後期開講のリレー講義（文化学科の各地域研究総論・法律経済学科の基礎総合科目）についても実施対象とする。④資格科目の講義科目は実施対象としない。⑤登録受講生数が3人未満の科目は実施しない。前期は両学科あわせて93科目、後期は同じく88科目である。なお、この数字は授業コードをもとにしている。

### ④ 調査結果の取り扱い

アンケートがWEB入力になるとともに、アンケート結果についても、各教員がWEBで確認することになった。結果は棒グラフでも表示されており、見やすくなった。評価結果を迅速かつ適切に担当者に伝えることにより、各教員が次年度（学期）の授業をより学生の満足度の高いものへと改善していくことにつながっていると考える。

## 2. 調査結果

以下では、まず、学部全体および学科ごとのアンケート集計結果を示す。学部全体の結果と、学務チームの協力で集計された学科ごとの数値を併置する形で示す。WEB からダウンロードしたデータを使ったため、前期と後期とそれぞれの集計結果意を以下に示す。

学部全体の集計結果と学科ごとの数値には、技術的な問題等により、一部数値の合計が合わない部分があることを申し添える。

### (1)学部および学科ごとの集計結果

#### ①質問項目の単純集計

##### ②小括

### (2)授業に対する自由記述欄の特徴

#### ①概要

#### ②文化学科

#### ③法律経済学科

### (1)学部および学科ごとの集計結果

#### ① 質問項目の単純集計

ここでは平均値を中心に見ていく。まず、最重要項目ともいえる満足度(Q1)では前期、後期とも4.0を超えている。講義の理解度を示す(Q3)についても、前期、後期とも4.0となっていて、これは前年度以上によい結果が出ている。全体として引き続いて学生からの評価が高いまま推移していることがわかる。ただしシラバスの有効活用について(Q2)は、前期2.9、後期3.0となっており、前年度から引き続き低めである。このことから、学習においてシラバスが十分活用されていないことが示唆されていると思われる。今後もシラバスが活用されるように促すことを検討することが必要ではないかと思われる。

次に講義などへの興味関心(意欲)や、知識の獲得・知的刺激に関わる設問(Q4およびQ5)についてである。これらの項目においても、前年度を上回る数値を示したが、前期、後期とも4.0を超えている。

そして、学生自身の講義へ向かう姿勢などについても尋ねている(Q6~Q9)。Q6では、講義で学んだことを活かしたかどうかを問うが、前期3.4、後期3.5と前年より高くなっている。また、講義に関係して、能動的な学習を行ったかどうかを問うQ7においては、前期3.5、後期3.4と、前年度以上によい結果が示された。ただ、あえて言えば、前2つの設問(Q4およびQ5)と比べると相対的に低めの数値となっているのは昨年どおりである。学ぶ主体の形成に関わるさらなる工夫の余地があるのかどうか、検討を要するかもしれない。

また、授業一回当たりの授業外学習時間(Q8)の結果から、学習時間の増加へ向けたさらなる工夫が必要である点は、前年度からなお問題を有したままであり、要改善点といえる。

教育改善の項目(Q17~Q21)については、数値からみる限り、大半が5%以下の範囲に収まっており、大半の学生が現状に大きな不満を持っていないことが看取できる。改善項目として多いもの(4%以上のもの)をみると、「わかりやすい説明」(Q37)、「授業内で提示される資料(板書や投影資料など)」(Q34)、「成績評価の方法、評価基準の説明」(Q33)、



「授業の目的・到達目標の説明」(Q31)、「話し方(聞き取りやすさなど)」(Q36)となっている。基本的な講義方法や、講義の趣旨や内容の説明についてより改善を求めているようである。相対的に高い数値となっているものであるが、講義内容の理解に深く関わることでもあるので、説明を十分尽くしているかについて、常に気に留めておくべきことではある。

なお、授業評価とは別に、「4つの力」に関する項目を設けている(Q10~16)。本項目は、「授業評価」に関するものではないため、他の項目との単純な平均値比較はできない。本項目の質問内容は、Q10~13は、授業を通して「4つの力」が成長したかどうかを問うものである。また、Q14~16では、「4つの力」に関連した項目について複数の選択肢を設け、授業を通して身に着いた「力」を問うている。アンケート結果をみると、4つの力については、「考える力」が高く、「コミュニケーション力」が比較的低くなっている。また、授業を通して身についた「力」についてみると、「専門知識・技術」、「幅広い教養」、「論理的思考力」など「考える力」に関する項目が特に高い。「主体的学習力」、「倫理観」など「感じる力」に関する項目も次いで多くなっているが、「コミュニケーション力」では「社会人としての態度」を挙げる学生が法律経済学科の方に多かった。こうした能動的な姿勢が求められる項目をさらに高めていく必要があると思われる。

## ② 小括

前期のUNIPAを使用した新しい授業アンケートは回答率が19.6%、後期はスマホ対応が可能となり、回答率は26.6%に上がったが、まだ少ない。周知徹底やよりアクセスしやすい環境づくりなどにおいて改善の余地があると考えられる。

授業評価に関連する設問については、前年度から平均値が高水準で推移していることに加え、教育改善に関する項目では昨年引き続き改善を求める意見も比較的少数である。学生の要望に教員が真摯に向き合い、授業改善への教員の努力が表れた結果と言える。今回のアンケートに示された結果を踏まえ、さらなる授業改善へ向けて活かしていくための継続的努力が必要であろう。

## IV. 学部生による「授業改善のためのアンケート」

期間：2017/07/17(月) 00:00～2017/07/30(日) 23:59

対象人数(延べ数)：6723人 回答人数(延べ数)：1321人 回答率 19.6%

### 2017(H29)年度J前期 授業アンケート

この調査の目的は、学生が自らの学びを振り返り改善できるように、学びの履歴を提供すること、そして大学が教育を改善するための情報を得ることです。

以下の設問には、すべて、授業だけではなく、授業外学習も含めて、回答してください。

※大学の単位制度：

講義の場合、1回あたり90分の授業と4時間の授業外学習を必要とする内容に対して、2単位が配当されています。

### 学びの振り返りシート

#### I あなたの学びに関する項目

以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。

1 総合的に判断して、この授業に満足できた。(必須)	比率	人数	4.1点
あてはまらない	3%	38人	
あまりあてはまらない	5%	72人	
どちらともいえない	14%	187人	
ややあてはまる	38%	505人	
あてはまる	39%	519人	
2 授業内外の学習に取り組むために、シラバスを活用した。(必須)	比率	人数	2.9点
あてはまらない	22%	292人	
あまりあてはまらない	19%	247人	
どちらともいえない	20%	260人	
ややあてはまる	23%	308人	
あてはまる	16%	214人	
3 この授業の内容について理解できた。(必須)	比率	人数	4.0点
あてはまらない	2%	30人	
あまりあてはまらない	5%	63人	
どちらともいえない	14%	189人	
ややあてはまる	49%	644人	
あてはまる	30%	395人	
4 新しい知識・考え方・技術などが獲得できた。(必須)	比率	人数	4.2点
あてはまらない	2%	25人	
あまりあてはまらない	3%	39人	
どちらともいえない	9%	117人	
ややあてはまる	41%	547人	
あてはまる	45%	593人	
5 この授業の受講によって、学業への興味・関心(意欲)が高まった。(必須)	比率	人数	4.0点
あてはまらない	3%	41人	
あまりあてはまらない	6%	75人	
どちらともいえない	17%	223人	
ややあてはまる	36%	471人	
あてはまる	39%	511人	
6 この授業で学んだことや考え方について、意識するようになり実際に試してみたりした。(必須)	比率	人数	3.4点
あてはまらない	8%	109人	
あまりあてはまらない	13%	167人	
どちらともいえない	27%	351人	
ややあてはまる	33%	440人	
あてはまる	19%	254人	
7 学びを深めるために、調べたり尋ねたりした。(必須)	比率	人数	3.5点
あてはまらない	10%	129人	
あまりあてはまらない	13%	172人	
どちらともいえない	20%	269人	
ややあてはまる	33%	439人	
あてはまる	24%	312人	
8 授業1回当たりの授業外学習(予習・復習・課題や試験のための学習・関連する読書や活動など)は何時間でしたか。(必須)	比率	人数	2.0点
30分未満	43%	563人	
30分～1時間未満	26%	339人	
1時間～2時間未満	21%	272人	
2時間～4時間未満	7%	97人	

Copyright 2006 Japan System Techniques Co., Ltd. All rights reserved

#### IV. 学部生による「授業改善のためのアンケート」

回数	比率	人数
4時間以上	4%	50人
9 この授業を何回欠席しましたか。(必須)	1.9点	
0回	54%	712人
1回	19%	253人
2回	16%	205人
3~4回	10%	126人
5回以上	2%	25人

#### II 4つの力に関する項目①

以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。(4つの力は授業外学習も含め、大学生としての活動のすべてを通して身につけるものです。さらに、各授業においても、4つの力の重点度には軽重があります。その意味で、いくつか「成長しなかった」でも結構ですので、4つの力のすべてに回答してください。)

10 この授業を通して、「感じる力」が成長したと思う。(必須)	比率	人数	2.2点
全く成長しなかった	7%	95人	
わずかながら成長した	20%	262人	
少し成長した	29%	383人	
ある程度成長した	33%	433人	
かなり成長した	11%	148人	
11 この授業を通して、「考える力」が成長したと思う。(必須)	比率	人数	2.6点
全く成長しなかった	4%	51人	
わずかながら成長した	12%	161人	
少し成長した	26%	340人	
ある程度成長した	37%	490人	
かなり成長した	21%	279人	
12 この授業を通して、「コミュニケーション力」が成長したと思う。(必須)	比率	人数	1.5点
全く成長しなかった	27%	361人	
わずかながら成長した	25%	329人	
少し成長した	23%	304人	
ある程度成長した	18%	240人	
かなり成長した	7%	87人	
13 この授業を通して、「生きる力」が成長したと思う。(必須)	比率	人数	2.0点
全く成長しなかった	11%	142人	
わずかながら成長した	24%	322人	
少し成長した	31%	410人	
ある程度成長した	25%	331人	
かなり成長した	9%	116人	

#### III 4つの力に関する項目②

以下の「4つの力の構成要素」の観点について、この授業を通して成長したと思えるものを選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。

感じる力	人数
14.感性	429人
15.共感	241人
16.倫理観	301人
17.モチベーション	240人
18.主体的学習力	442人
19.心身の健康に対する意識	46人
考える力	人数
20.幅広い教養	617人
21.専門知識・技術	637人
22.論理的思考力	350人
23.批判的思考力	278人
24.課題探求力	312人
25.問題解決力	180人
コミュニケーション力	人数
26.情報発信力	322人
27.討論・対話力	222人
28.指導力・協調性	52人
29.社会人としての態度	188人
30.実践外国語力	53人

(以下、「授業改善のためのアンケート」です。)

#### 授業改善のためのアンケート

#### IV 教育改善の項目

この授業をもっとよくするためには、どのような点を改善すればいいと考えますか。以下の項目から選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。

授業の概要の説明(口頭、シラバスなどによる)	人数
31.授業の目的・到達目標の説明	110人
32.授業全体の計画、学習内容	

IV. 学部生による「授業改善のためのアンケート」

の説明		111人
33.成績評価の方法、評価基準 の説明		86人
<b>教室内で使用する教材</b>	<b>人数</b>	
34.授業内で提示される資料(板 書や投影資料など)		173人
35.配布資料・Web資料など (Moodleも含む)		107人
<b>教員の行動</b>	<b>人数</b>	
36.話し方(聞き取りやすさなど)		124人
37.わかりやすい説明		170人
38.発展的な内容の説明		56人
39.学習内容の具体的な活用方 法の説明		74人
40.私語/遅刻/睡眠/携帯メールなど 不謹慎な行動への対処		48人
<b>学生参加の機会</b>	<b>人数</b>	
41.学生自身に考えさせる工夫		94人
42.質問の機会		52人
43.学生との対話の機会		62人
44.学生同士で考えを深め合う場 や機会の提供や支援		83人
44.補足 (グループ活動の実施や支援など)		
<b>授業外学習のための支援</b>	<b>人数</b>	
45.自学自習のための教材/資料 等の情報		52人
46.授業時間外での課題(宿題も 含む)		25人
47.学習に対する助言や補足		76人
48.質問や課題への適切な対応		22人
49.Moodleや電子メールなどの使 用		54人
45.の補足 (参考図書・参考資料等も含む)		
<b>その他教員から指定のある項目</b>	<b>人数</b>	
50.(教員が指定する項目)		0人

V 授業改善に関する記述欄

それぞれ240文字以内で記入してください。

51.先生に続けてほしいと思うこと。

52.自分が先生だったらこうしたいと思うこと。

IV. 学部生による「授業改善のためのアンケート」

【2017年度前期アンケートまとめ】文化学科			
設問1	比 率	人 数	4.09点
	1.82%	16	
	6.24%	55	
	12.37%	109	
	40.52%	357	
	39.05%	344	
設問2	比 率	人 数	2.91点
	22.02%	194	
	20.20%	178	
	17.93%	158	
	24.74%	218	
	15.10%	133	
設問3	比 率	人 数	4.05点
	1.36%	12	
	4.31%	38	
	12.49%	110	
	51.31%	452	
	30.53%	269	
設問4	比 率	人 数	4.26点
	1.25%	11	
	3.29%	29	
	8.51%	75	
	42.00%	370	
	44.95%	396	
設問5	比 率	人 数	4.03点
	2.04%	18	
	6.36%	56	
	15.78%	139	
	37.80%	333	
	38.02%	335	
設問6	比 率	人 数	3.45点
	7.38%	65	
	11.92%	105	
	26.56%	234	
	36.44%	321	
	17.71%	156	
設問7	比 率	人 数	3.51点
	9.42%	83	
	12.26%	108	
	20.66%	182	
	33.71%	297	
	23.95%	211	
設問8	比 率	人 数	2.08点
	39.50%	348	
	27.01%	238	
	22.59%	199	
	7.83%	69	
	3.06%	27	
設問9	比 率	人 数	1.79点
	56.41%	497	
	19.75%	174	
	13.73%	121	
	8.51%	75	
	1.59%	14	
設問10	比 率	人 数	2.24点
	5.90%	52	
	19.18%	169	
	28.17%	257	
	36.44%	321	
	9.31%	82	
設問11	比 率	人 数	2.59点
	3.18%	28	
	12.15%	107	
	25.77%	227	
	40.07%	353	
	18.84%	166	
設問12	比 率	人 数	1.54点
	25.88%	228	
	25.99%	229	
	21.79%	192	
	20.89%	184	
	5.45%	48	
設問13	比 率	人 数	2.69点
	8.74%	77	
	26.67%	235	
	31.90%	281	
	24.97%	220	
	25.99%	229	
設問14		人 数	
		323	
		189	
		220	
		163	
		304	
		38	
設問15		人 数	
		443	
		403	
		235	
		202	
		211	
		126	
設問16		人 数	
		243	
		172	
		39	
		125	
		52	
		人 数	
設問17			
		73	
		69	
		46	
設問18		人 数	
		107	
		69	
設問19		人 数	
		73	
		100	
		34	
		56	
		22	
設問20		人 数	
		65	
		32	
		40	
		60	
設問21		人 数	
		30	
		17	
		58	
		16	
		31	

【2017年度前期アンケートまとめ】法律経済学科			
設問1	比 率	人 数	4.00点
	4.35%	28	
	5.12%	33	
	15.84%	102	
	35.71%	230	
	38.98%	251	
設問2	比 率	人 数	2.92点
	23.76%	153	
	18.32%	118	
	18.79%	121	
	20.65%	133	
	18.48%	119	
設問3	比 率	人 数	3.90点
	3.42%	22	
	5.59%	36	
	17.70%	114	
	43.94%	283	
	29.35%	189	
設問4	比 率	人 数	4.23点
	2.80%	18	
	2.17%	14	
	9.32%	60	
	40.37%	260	
	45.34%	292	
設問5	比 率	人 数	3.97点
	4.81%	31	
	4.66%	30	
	17.86%	115	
	34.47%	222	
	38.20%	246	
設問6	比 率	人 数	3.36点
	9.94%	64	
	14.44%	93	
	25.78%	166	
	28.88%	186	
	20.96%	135	
設問7	比 率	人 数	3.27点
	12.42%	80	
	16.77%	108	
	20.96%	135	
	31.52%	203	
	18.32%	118	
設問8	比 率	人 数	1.82点
	51.71%	333	
	25.78%	166	
	15.22%	98	
	3.57%	23	
	3.73%	24	
設問9	比 率	人 数	1.91点
	52.64%	339	
	17.86%	115	
	17.55%	113	
	10.09%	65	
	1.86%	12	
設問10	比 率	人 数	2.18点
	8.85%	57	
	20.65%	133	
	28.57%	184	
	27.02%	174	
	14.91%	96	
設問11	比 率	人 数	2.61点
	4.97%	32	
	12.73%	82	
	24.22%	156	
	32.76%	211	
	25.31%	163	
設問12	比 率	人 数	1.48点
	29.19%	188	
	25.00%	161	
	23.60%	152	
	13.51%	87	
	8.70%	56	
設問13	比 率	人 数	2.01点
	12.73%	82	
	21.74%	140	
	29.04%	187	
	24.69%	159	
	11.80%	76	
設問14		人 数	
		131	
		116	
		135	
		114	
		212	
		28	
設問15		人 数	
		290	
		296	
		176	
		131	
		156	
		103	
設問16		人 数	
		144	
		87	
		29	
		118	
		2	
		人 数	
設問17			
		72	
		63	
		58	
設問18		人 数	
		103	
		64	
設問19		人 数	
		78	
		103	
		31	
		35	
		38	
設問20		人 数	
		60	
		34	
		37	
		43	
設問21		人 数	
		34	
		14	
		43	
		10	
		38	

## IV. 学部生による「授業改善のためのアンケート」

期間：2018/01/22(月) 00:00～2018/02/04(日) 23:59

対象人数(延べ数)：5736人 回答人数(延べ数)：1524人 回答率 26.6%

### 2017(H29)年度後期 授業アンケート(回答期間：2018/1/22～2/4)

この調査の目的は、学生が自らの学びを振り返り改善できるように、学びの履歴を提供すること、そして大学が教育を改善するための情報を得ることです。

以下の設問には、すべて、授業だけではなく、授業外学習も含めて、回答してください。

※大学の単位制度：

講義の場合、1回あたり90分の授業と4時間の授業外学習を必要とする内容に対して、2単位が配当されています。

### 学びの振り返りシート

#### I あなたの学びに関する項目

以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。

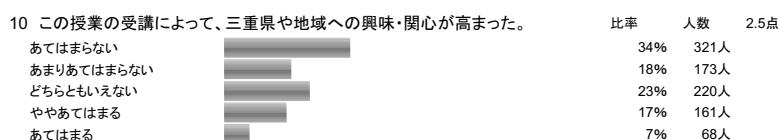


Copyright 2006 Japan System Techniques Co., Ltd. All rights reserved

#### IV. 学部生による「授業改善のためのアンケート」

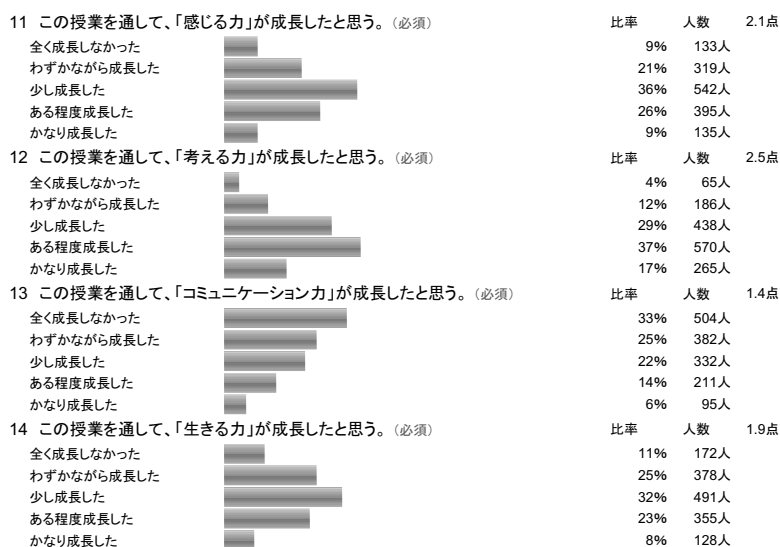


#### II 地域に関する学びの項目(関連がなかった授業では回答しないでください)



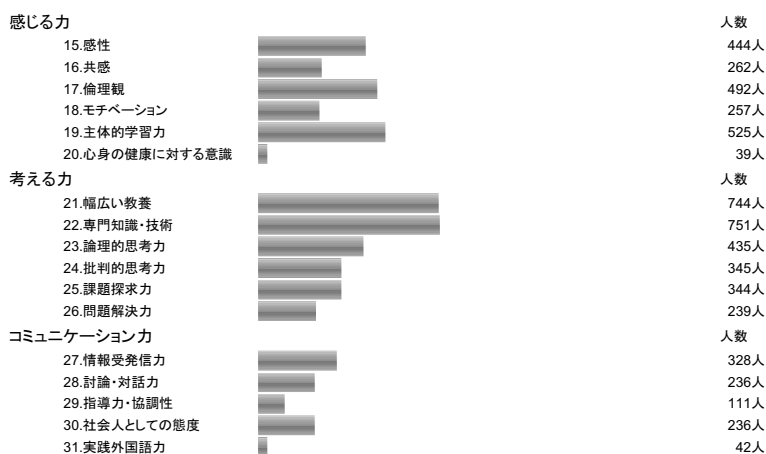
#### III 4つの力に関する項目①

以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。(4つの力は授業外学習も含め、大学生としての活動のすべてを通して身につけるものです。さらに、各授業においても、4つの力の重点度には軽重があります。その意味で、いくつか「成長しなかった」でも結構ですので、4つの力のすべてに回答してください。)



#### IV 4つの力に関する項目②

以下の「4つの力の構成要素」の観点について、この授業を通して成長したと思えるものを選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。



(以下、「授業改善のためのアンケート」です。)

## 授業改善のためのアンケート

## V 教育改善の項目

この授業をもっとよくするためには、どのような点を改善すればいいと考えますか。以下の項目から選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。

授業の概要の説明(口頭、シラバスなどによる)	人数
32.授業の目的・到達目標の説明	96人
33.授業全体の計画、学習内容の説明	98人
34.成績評価の方法、評価基準の説明	103人
教室内で使用する教材	人数
35.授業内で提示される資料(板書や投影資料など)	118人
36.配布資料・Web資料など(Moodleも含む)	96人
教員の行動	人数
37.話し方(聞き取りやすさなど)	87人
38.わかりやすい説明	147人
39.発展的な内容の説明	64人
40.学習内容の具体的な活用方法の説明	65人
41.私語/遅刻/睡眠/携帯メールなど不謹慎な行動への対処	32人
学生参加の機会	人数
42.学生自身に考えさせる工夫	71人
43.質問の機会	63人
44.学生との対話の機会	51人
45.学生同士で考えを深め合う場や機会の提供や支援	47人
45.補足 (グループ活動の実施や支援など)	
授業外学習のための支援	人数
46.自学自習のための教材/資料等の情報	43人
47.授業時間外での課題(宿題も含む)	26人
48.学習に対する助言や補足	70人
49.質問や課題への適切な対応	32人
50.Moodleや電子メールなどの使用	40人
46.の補足 (参考図書・参考資料等も含む)	
その他教員から指定のある項目	人数
51.(教員が指定する項目)	4人

## VI 授業改善に関する記述欄

それぞれ240文字以内で記入してください。

52.先生に続けてほしいと思うこと。

53.自分が先生だったらこうしたいと思うこと。



IV. 学部生による「授業改善のためのアンケート」

【2017年度後期アンケートまとめ】文化学科			
設問1	比率	人数	4.24点
		1.04%	8
		2.86%	22
		10.39%	80
		42.34%	326
		43.38%	334
設問2	比率	人数	2.94点
		18.44%	142
		20.00%	154
		23.12%	178
		26.23%	202
		12.21%	94
設問3	比率	人数	4.06点
		1.30%	10
		2.60%	20
		11.30%	87
		58.44%	450
		26.36%	203
設問4	比率	人数	4.27点
		1.04%	8
		2.73%	21
		6.10%	47
		48.83%	376
		41.30%	318
設問5	比率	人数	4.06点
		1.56%	12
		2.73%	21
		17.01%	131
		45.97%	354
		32.73%	252
設問6	比率	人数	3.47点
		6.75%	52
		10.78%	83
		28.31%	218
		36.88%	284
		17.27%	133
設問7	比率	人数	3.41点
		8.57%	66
		14.42%	111
		22.86%	176
		35.84%	276
		18.31%	141
設問8	比率	人数	1.83点
		48.83%	376
		29.61%	228
		13.25%	102
		6.49%	50
		1.82%	14
設問9	比率	人数	2.01点
		43.90%	338
		25.32%	195
		18.05%	139
		11.82%	91
		0.91%	7
設問10	比率	人数	1.41点
		21.30%	164
		11.04%	85
		12.08%	93
		9.09%	70
		5.06%	39
設問11	比率	人数	2.14点
		6.10%	47
		20.52%	158
		35.58%	274
		28.70%	221
		9.09%	70
設問12	比率	人数	2.54点
		2.21%	17
		12.60%	97
		30.13%	232
		39.48%	304
		15.58%	120
設問13	比率	人数	1.38点
		30.39%	234
		26.88%	207
		23.38%	180
		12.60%	97
		6.75%	52
設問14	比率	人数	1.88点
		9.61%	74
		28.96%	223
		32.21%	248
		22.60%	174
		6.62%	51
設問15		人数	
		303	
		170	
		260	
		145	
		262	
		17	
設問16		人数	
		445	
		368	
		232	
		179	
		163	
		90	
設問17		人数	
		182	
		139	
		41	
		97	
		30	
設問18		人数	
		38	
		43	
		45	
設問19		人数	
		46	
		40	
設問20		人数	
		27	
		63	
		22	
		26	
		15	
設問21		人数	
		27	
		32	
		18	
		14	
設問22		人数	
		16	
		11	
		31	
		17	
		23	

【2017年度後期アンケートまとめ】法律経済学科			
設問1	比率	人数	3.98点
		3.23%	24
		5.38%	40
		15.07%	112
		42.53%	316
		33.78%	251
設問2	比率	人数	3.04点
		17.90%	133
		18.71%	139
		21.40%	159
		25.84%	192
		16.15%	120
設問3	比率	人数	3.86点
		2.83%	21
		6.33%	47
		18.17%	135
		47.38%	352
		25.30%	188
設問4	比率	人数	4.10点
		2.83%	21
		2.96%	22
		2.92%	22
		43.88%	326
		37.42%	278
設問5	比率	人数	3.91点
		3.23%	24
		6.59%	49
		16.42%	122
		37.74%	285
		30.01%	223
設問6	比率	人数	3.42点
		6.19%	46
		14.13%	105
		27.86%	207
		34.09%	260
		16.82%	125
設問7	比率	人数	3.37点
		8.08%	60
		15.48%	115
		25.17%	187
		34.05%	253
		17.23%	128
設問8	比率	人数	1.73点
		54.84%	406
		27.19%	202
		11.31%	84
		4.17%	31
		2.69%	20
設問9	比率	人数	2.20点
		37.28%	277
		27.74%	202
		18.71%	139
		12.38%	92
		4.44%	33
設問10	比率	人数	1.67点
		20.46%	152
		11.44%	85
		17.50%	130
		12.52%	93
		4.17%	31
設問11	比率	人数	1.97点
		11.44%	85
		21.13%	157
		35.26%	262
		23.69%	176
		8.48%	63
設問12	比率	人数	2.47点
		6.59%	49
		11.71%	87
		27.66%	207
		35.67%	265
		18.17%	135
設問13	比率	人数	1.30点
		36.20%	269
		23.15%	172
		20.19%	150
		14.94%	111
		5.52%	41
設問14	比率	人数	1.99点
		13.19%	98
		20.05%	149
		31.26%	236
		24.63%	183
		10.36%	77
設問15		人数	
		141	
		95	
		223	
		111	
		250	
		21	
設問16		人数	
		298	
		364	
		189	
		160	
		170	
		144	
設問17		人数	
		139	
		87	
		65	
		144	
		13	
設問18		人数	
		59	
		56	
		60	
設問19		人数	
		72	
		57	
設問20		人数	
		60	
		85	
		42	
		40	
		18	
設問21		人数	
		44	
		30	
		33	
		33	
設問22		人数	
		26	
		15	
		38	
		16	
		18	

## (2) 授業に対する自由記述の特徴

### ① 概要

学生の具体的な意見を把握する目的で、自由記述欄の回答に対する分析をおこなう。本年度のアンケート回収総数（前期と後期の合計数）は 3,038（文化学科 1,651、法律経済学科 1,387）であり、うち Q23 および Q24 の自由記述欄に記述のあった件数は 349 件（文化学科 196 件、法律経済学科 153 件）であった。参考までに、この 10 年間について、自由記述欄に記入があった件数の変化を一覧表にした。ただし、資格科目をアンケートの対象としたのは、2008 年度からであり、時系列的な変化を確認するため、ここでは資格科目を除いた数値を記載した。例年に比べ、法律経済学科の回答が少なかった。

年度	アンケート回収総数	自由記述欄に記入があった件数	文化学科	法律経済学科
2007	6,410	641 件 (10.0%)	182 件	455 件
2008	7,236	663 件 (9.2%)	162 件	501 件
2009	7,079	772 件 (10.9%)	133 件	639 件
2010	7,001	474 件 (6.8%)	66 件	408 件
2011	6,634	441 件 (6.6%)	56 件	345 件
2012	6,453	634 件 (9.8%)	193 件	400 件
2013	6,393	626 件 (9.8%)	251 件	324 件
2014	3,608	516 件 (14.3%)	150 件	366 件
2015	3,424	385 件 (11.2%)	113 件	385 件
2016	3,529	417 件 (11.8%)	209 件	208 件
2017	3,038	349 件 (11.5%)	196 件	153 件

（注. 2009 年度については資格科目を含んだ件数と思われる）

本年度の自由記述欄への回答率は、前年度と同様であったが、教員個人の授業に対する記述はないものも多かった。回答者の少ないことと連動していよう。学科必修科目ではアンケートが確実に実施されるので、昨年からはじめた「地域から考える文化と社会」をはじめ、リレー講義科目に対する記述が多い。

2010 年度から自由記述の設問が変更されたが（Q23「先生に続けてほしいと思うこと」、Q24「自分が先生だったらこうしたいと思うこと」）、これに対しては、設問の趣旨や狙いがわかりにくいという学生の声も少なからずあり、設問の設定には改善の余地があると思われる。

以下、文化学科、法律経済学科に分けて、記述内容を検討する。

## ② 文化学科

### 【先生に続けてほしいと思うこと】

文化学科の開講科目では、映像・写真等の視覚教材や、スライド資料や参考プリントの配付または Moodle への掲載、等々、各授業においてさまざまな教材が使用されており、それらに対して多くの好意的評価が寄せられている。このような特徴はここ数年見られる傾向であるが、いっそう強まっているように思われる。教員のおもしろい導入の話に惹かれるということも挙げられている。

例年通り、授業の組み立て方として、学生に発表をさせる、グループディスカッションなどのグループワークを取り入れるといった、学生参加型の授業は概ね好評である。これらは、他の人の様々な意見に触れることにより、自分自身の理解、知識を深めることができる点が特に評価されているようである。また、講義冒頭での前回の復習、小テストの実施など、受講者に対しきめ細やかな対処を行っている授業に対しては、学生の評価は高い。

ゲストスピーカーによるリレー講義も多様な意見をきく機会として好意的に捉えられている。

### 【自分が先生だったらこうしたいと思うこと】

板書を丁寧にする、プリントや資料を読みやすくするという学生の要望は普遍的で、本年度のアンケートでも見られる。授業の内容や構成などについても、分かりやすさを求める声が目立った。

リレー講義では、講義中心になることへの不満や課題の出し方への要望があった。

## ③ 法律経済学科

### 【先生に続けてほしいと思うこと】

例年通り、授業の仕方について、説明が丁寧でわかりやすく、板書やレジュメ、資料（図表など）が効果的に用いられている授業が評価されている。資料やレジュメの充実は、講義後の復習をする上でも有用であるとの意見が多かった。また、授業の冒頭に前回の振り返りをすることや、特に重要な点など繰り返し説明することも評価が高い。講義の聞き逃し防止や的確にメモを取るためにも有用と思われる。また、情熱的な講義、折にふれて雑談や質問をすることも、学生の注意を喚起するうえで有効な模様である。

リレー講義では多様な講師の講義が聞ける点を評価している。

授業の構成について、映像教材を取り入れた授業への言及が昨年に比べると少なかった。グループディスカッションの試みも引き続き行われており、学生の受けとめ方も概して良好である。その一方で、板書を多用する授業も、ノートをとるという作業を通じて理解が進むためなのか評価が高い。それぞれの授業内容に適した工夫こそが有効ということだろう。

毎回の講義のポイントを講義の冒頭あるいは終了時点で何度か示されるとよりわかりやすい、という声も見られる。

**【自分が先生だったらこうしたいと思うこと】**

分かりやすいレジュメと共に、学生への質問や小テストなどで、理解を確認しながら進めてほしいなど、確実な理解に基づき進行する授業への要望が多かった。中間試験の実施や出席への評価を望む声も散見された。

例年通り、授業における話し方や板書への要望も多かったが、説明の一文が長いや、ゆっくりと話す、難しい内容は繰り返すなど、学生自身の理解のペースへの斟酌を求めている。ホワイトボードのマーカーが薄くて見にくいという指摘はつい起こりがちな状況であり、ホワイトボードの使い勝手には注意したい。

リレー講義により顕著だが、単調な講義への不満とともに、態度の悪い学生に注意してほしいという声が複数あった。



## V. 教員による「授業に関するアンケート」

## V. 教員による「授業に関するアンケート」

### 1. アンケートの概要

#### アンケートの目的と方法

教員による「授業に関するアンケート」は、教員が授業で使用している教材や授業で行っている工夫などについての基礎データを収集し分析することにより、次年度以降の教育内容・教育方法の改善のための資料提供を行うことをおもな目的としている。

実施については、本年度より紙媒体の学生による授業アンケートがなくなったので、回収方法を変更した。学生による授業アンケート実施の同時期に、各教員に用紙を配布し、学務に設置するボックスにて回収した。

#### ① 質問項目(巻末資料参照)

昨年度の項目をもとに作成した。

#### ② 調査対象科目

専任教員および特任教員が担当する人文学部専門課程（前期・後期）の講義と演習科目を対象に、調査を行った。回収されたのは 181 科目（文化学科 140 科目、法律経済学科 41 科目）である。

なお、昨年度と同様、リレー講義科目については、一つの科目に複数の教員からの回答が集計されている場合がある。

#### ③ アンケート結果分析の視点

前期科目と後期科目の区別はせず、人文学部全体・文化学科・法律経済学科の 3 区分で集計し、それぞれのデータを記載した。また、昨年度と同じ質問・選択肢については、増減ポイントを示した。

### 2. 調査結果

#### 概要

「授業で使用している教材・機器」については、やはり教科書・プリントの使用率が高い。

ただ教科書については若干使用率が減っている。その他は昨年からの大きな変動はない。また、「授業で取り入れている方法」では、ディスカッションが減少している。これは昨年度増えた反動といるかもしれない。また Moodle の利用も若干減っているが、これも昨年増えた分が戻ったといえるかもしれない。その他全体的に見て多様な方法が利用されていることがわかる。

試験・レポートの実施に関しては、「課していない」が昨年度と比べて減っている。その分試験・レポートを「全員に返却する」と「返却しない」が増えた。

学生の独習意欲の向上のための工夫について自由記述をお願いした。抄録ではあるが、学科ごとに分けて下記に紹介しておく。教員各自が授業計画を立てる際に参考になるはずである。

休講回数については、学部全体で大幅な変動はない。また、休講した場合の補講に代わる措置については、「課題を与える」に類する対応が多かった。

最後に「今年度の工夫」についてだが、先の「独習意欲の向上のための工夫」と同様、多様な回答が寄せられた。これも抄録ではあるが、下記に示しておく。

以下、調査結果の詳細を順次示しておく。

### ① 授業で使用している教材・機器

表 V-1 使用している教材・機器（単位：授業数、複数回答可）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
人文学部 181	52 28.7%	158 87.3%	37 20.4%	50 27.6%	0 0.0%	60 33.1%	17 9.4%	12 6.6%	33 18.2%	10 5.5%
増減（ポイント）	-3	+2	-2	0	0	+1	-3	+3	-3	+2
文化学科 140	38 27.1%	123 87.9%	26 18.6%	39 27.9%	0 0.0%	42 30.0%	13 9.3%	11 7.9%	25 17.9%	9 6.4%
増減（ポイント）	-2	0	-1	-1	0	-3	-4	+4	-4	+2
法律経済学科 41	14 34.1%	35 85.4%	11 26.8%	11 26.8%	0 0.0%	18 43.9%	4 9.8%	1 2.4%	8 19.5%	1 2.4%
増減（ポイント）	-6	+7	-3	+2	0	+14	-1	-3	0	+2

注 1) 表中の 1～10 は次の通り。1 教科書、2 プリント、3 参考書、4 ビデオ・DVD、5 OHP、6 パワーポイント、7 パソコン（6 以外）、8 実物または模型、9 Moodle、10 その他。

注 2) 増減は昨年度の構成比との比較で、参考までに記載した。

#### 「その他」の記載例

文化学科：測量機器 / 資料の複製本 / 学術論文（複数回答） / CD / 野外観察

法律経済学科：学術論文 / 新聞



## ② 取り入れている授業方法

表V-2 取り入れている授業方法(単位:授業数、複数回答可)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
人文学部 181	108 59.7%	48 26.5%	13 7.2%	11 6.1%	8 4.4%	87 48.1%	64 35.4%	37 20.4%	29 16.0%	36 19.9%	9 5.0%
増減(ポイント)	-3	+4	+1	+1	-5	-7	+3	+2	-4	-3	-3
文化学科 140	92 65.7%	38 27.1%	9 6.4%	10 7.1%	4 2.9%	76 54.3%	52 37.1%	28 20.0%	23 16.4%	28 20.0%	6 4.3%
増減(ポイント)	0	+3	0	+3	-5	-2	+3	+2	-4	+3	-3
法律経済学科 41	16 39.0%	10 24.4%	4 9.8%	1 2.4%	4 9.8%	11 26.8%	12 29.3%	9 22.0%	6 14.6%	8 19.5%	3 7.3%
増減(ポイント)	+17	+7	+3	+3	-5	-22	+1	+1	-5	+4	-3

注1) 表中の1~11は次の通り。1 学生を指名する、2 ビデオ・DVD、3 現場見学・観察、4 実習・実地調査、5 デイバート、6 ディスカッション、7 (学生による) プレゼンテーション、8 リアクション・ペーパー、9 Moodle、10 小テスト、11 その他。

## 「その他」の記載例

文化学科：ワークシート / 文献検索実習 / インターネットの利用

法律経済：レポートあるいは小レポート(複数回答) / 演習

## ③ 試験・レポートの返却

表V-3 試験・レポートの返却(単位:授業数)

	全員に返却	希望者に返却	返却しない	試験・レポートを 課していない
人文学部 181	54 29.8%	23 12.7%	68 37.6%	36 19.9%
増減(ポイント)	+4	-2	+3	-5
文化学科 140	44 31.4%	23 16.4%	47 33.6%	26 18.6%
増減(ポイント)	+3	-3	+1	-1
法律経済学科 41	10 24.4%	0 0.0%	21 51.2%	10 24.4%
増減(ポイント)	+5	-4	+23	-14

#### ④学生の独習意欲を向上させるための工夫(抄録)

《文化学科》

- ・教材や参考文献、文献リストの紹介。(複数回答)
- ・現地調査の実施。(複数回答)
- ・実物教材、画像、映像の提示。ビデオの利用。(複数回答)
- ・複数回のプレゼンテーション、発表。(複数回答)
- ・ディスカッションの導入。その準備をさせる。(複数回答)
- ・Moodle の利用。(複数回答)
- ・宿題を課している。(複数回答)
- ・小テストによる学習状況の確認。(複数回答)
- ・小テストとレポートの組み合わせによる指導。(複数回答)
- ・関連資料や活動を紹介。
- ・全員に複数回の発表を課している。異なる視点から一人一人きめ細かく助言し、計画的な学習に努めさせている。
- ・次回までに理解しておくべき用語や予習しておくべき教科書の箇所を具体的に指示している。
- ・テキストの要約・報告とディスカッションとグループワークを組み合わせ、主体的学習を行わざるをえない状況を作るようにしている。
- ・報告する学生への事前指導。
- ・課題に対する学生の相互コメントの実施。
- ・レスポンス・ペーパーへの応答。
- ・レポート内容の発表。
- ・担当部分を授業時間に発表してもらう。そのための準備が宿題となる。そして、自分で文献をさがして、それをもとにレポートにまとめてもらう。
- ・映像資料や文献資料及び調査すべき美術館などを学生に応じて紹介している。
- ・練習問題を作成し、毎週課している。
- ・講読している援護文献に重要な術語が出てきた場合、学生に調査発表させている。
- ・授業の冒頭で課題を与え、15分から20分で回答させている。
- ・ワークシートを埋めてくることを毎回の宿題として課している。ワークシートは毎回返却している。オプションの資料(論文)をMoodleにあげている。
- ・図書館の蔵書を中心に手に取りやすい文学作品を紹介している。
- ・作品と関連の深いシェイクスピア作品の場面などを原典から抜粋して紹介した。
- ・ペアでディスカッションをしている。
- ・抽象的な議論になりがちなので日常的な事例を積極的に紹介した。

## 《法律経済学科》

- ・教材や資料の紹介。(複数回答)
- ・予習課題、宿題を出している。(複数回答)
- ・小テストないし中間テストで確認している。(複数回答)
- ・リアクション・ペーパーの配布と逐一回答あるいは細かいコメントの記入(複数回答)
- ・中間試験について解説をおこない、答案の書き方や学習のポイントを説明している。
- ・発表者のレジюмеを数日前には全員にメールで送信し、事前学習を促している。
- ・単元終了ごとにレポートを課している。
- ・毎週課題を出し、次週に板書して報告させる。
- ・レポートに細かくコメントを書いている。
- ・適宜関連する時事問題をとりあげる。
- ・中間、期末テストの問題設定の工夫(自主的学習を促す)。
- ・Moodleに当日授業について自分で考えたことを書き込む。毎回のまとめと予習課題を提示する。
- ・多くの論文を紹介している。
- ・希望をふまえて施設先などを決めている。
- ・ペーパーの意見を集約して、フィードバックしている。
- ・プレゼンテーションの準備のために個別指導も行うことがある。
- ・出席カードに講義でわからないことを書いてもらい、次回の講義で説明している。
- ・ビデオ上映。

## ⑤休講について

## 休講回数

表V-4 休講の回数(単位:授業数)

	0回	1回	2回	3回	4回	5回以上
人文学部	105 58.0%	57 31.5%	14 7.7%	5 2.8%	0 0.0%	0 0.0%
増減(ポイント)	-2	+4	-2	+2	0	0
文化学科	81 57.9%	43 30.7%	12 8.6%	4 2.9%	0 0.0%	0 0.0%
増減(ポイント)	-6	+4	0	+3	0	0
法律経済学科	24 58.5%	14 34.1%	2 4.9%	1 2.4%	0 0.0%	0 0.0%
増減(ポイント)	+11	+4	-7	-3	0	0

## 休講に対する措置

### V-5 休講に対する措置（単位：授業数）

	補講を行った	補講に代わる措置を講じた	無回答
人文学部	15 19.7%	57 75.0%	4 5.3%
文化学科	11 18.6%	45 76.3%	3 5.1%
法律経済学科	4 23.5%	12 70.6%	1 5.9%

注) 総数は補講回数 1 回以上の授業。また、補講回数の無回答は含まない。

### 補講に代わる措置の例

文化学科：学生との個人相談の実施（複数回答） / 読むべき資料の提示（複数回答）

追加の課題（複数回答） / 美術館・展覧会見学

法律経済学科：資料の提示 / 長期休暇中に課題を出す

## ⑥今年度の工夫（抄録）

### 《文化学科》

- ・板書の工夫。（複数回答）
- ・内容のアップデート。内容面での工夫。（複数回答）
- ・配付プリントの工夫。（複数回答）
- ・より積極的な Moodle の利用。（複数回答）
- ・発表回数を増やす。（複数回答）
- ・ゲストスピーカーの依頼。（複数回答）
- ・課題の分量を多くした。
- ・学生が発表の中で取り組む「小テーマ」の名称をやめて、「テーマ、課題」とした。
- ・より適切なテキストやグループワークのテーマを検討のうえ選択した。
- ・発表を聞いて意見交換する時間をより多くとるようにした。
- ・客員教授による英語の講義。
- ・演習の前半にアカデミック・ライティングの知識授与をおこなうことで、課題に取り組むにあたっての方法論を意識させるようにした。
- ・レスポンス・ペーパーの利用。
- ・版本等の実物に触れてもらう。

- ・自由に討論をさせることで、学生が遠慮しすぎない雰囲気を形成できた。
- ・英語教職の模擬授業をおこない、演習テーマに関連付けて、学生同士で批評し合った。
- ・身近なニュースと講義内容の関連性を積極的に解説し、今日性を意識させるように心がけた。
- ・昨年行っていた簡単すぎる課題を削除した。また昨年より会話の戦略を強調した。
- ・パワーポイントの導入。
- ・古英語で書かれた作品に、現代英語の知識で読める文があるので、クラス全体で読んでみた。
- ・資料で引用する中国語の文章には必ず訳を付け、中国語未習者にもわかりやすくした。

《法律経済学科》

- ・抽象的内容が多い分、理解しやすいよう、パワーポイントで写真を見せつつ、講義した。
- ・映像を複数見せて内容をまとめさせ、各映像資料の関連性を記述させる。
- ・講義のベースになる研究資料をリニューアルしている。
- ・配布するプリントを増やした。
- ・取り扱う項目を厳選し、それぞれの事例説明を増やした。
- ・講義のペースを落とした。これにより中間テストの回答率がよくなった。
- ・教材を刷新した。



## VI. 大学院に関するFD活動

## VI. 大学院に関するFD活動

大学院教育は学部教育とは環境やその質において相違があり、それゆえ、その現状と課題を把握するため、独自のFD活動を行うことが望ましい。本年度、大学院教育に関しては、例年行っている大学院生による「授業改善のためのアンケート」、「三重の文化と社会」報告会および修士論文発表会の際の教員アンケートに加え、大学院教育に関するFD研修会を行なった。これらの結果を報告し、大学院教育の現状と課題について理解を深めたい。

### 1. 大学院生による「授業改善のためのアンケート」

#### (1) アンケートの概要

##### ① 授業評価実施の目的と方法

大学院教育の実質化を目的とした院生に対する授業評価アンケートが昨年度に引き続き全学で行われ、人文社会科学研究科でも全学統一のマークシートおよび自由記述欄を併用した書式で実施した。人文社会科学研究科では、開講科目の受講者数が少ないことなどを勘案し、本年度も昨年度と同様に個別授業に対してではなく、大学院生が本年度に履修した授業全体の総括的な評価を行うアンケートとし、前期履修分も含め、年度末に一括しておこなった。実施方法は、学部生へのアンケートと同じ期間に、大学院指導教員が授業等の時間に指導学生に対してアンケート用紙と解答用紙を配布し、学生に記入させ、学務担当の所定の箱に提出させることとした。

##### ② 質問項目（巻末資料1）

自由記述の質問に対する回答が少なかった。今年度は昨年度同様の「先生に続けて欲しいと思うこと」「自分が先生だったらこうしたいと思うこと」をそのまま使った。このような項目では回答しにくいとも思われたが、この授業評価アンケートは全学的に実施されるものであることを考慮し、今年度もそのまま踏襲した。人文社会科学研究科では受講した授業全体を評価するアンケートとしたため、4つの力に関する項目などの全学統一の質問項目では適合しないものが出た。それらの項目は調査結果から省いた。

##### ③ 調査対象学生

調査は正規学生 34 名（地域文化論専攻 16 名、社会科学専攻 18 名）を対象に行った。回収されたのは 11 名（地域文化論専攻 5 名、社会科学専攻 6 名）、回収率は 32.4%であった。昨年度の回収率は 47.1%であり、15 ポイント近く低下している。回収率は昨年度改善したが、今年度はまた一昨年並みに低下しており、回収率の向上の対策を取る必要がある。回収率の低さから現状では院生の動向をつかむ資料としては十分とは言い難いものの、在学中の学生全体を対象とした調査であることから、今後、自由記述項目などを積極的に利用すれば、有効な調査にすることができると考えられる。



## (2)調査結果

アンケート調査の母数がきわめて小さいため、数値の細かい増減を追うことはあまり意味をなさないため、ここでは全般的な傾向を捉えることに重きを置きたい。

まず、Q1の授業への満足度の問うた項目では、研究科全体の平均値が5段階評価で4.73と極めて高い数値を示しており、院生の少なさから少人数教育による行き届いた指導が行われていることが窺える。シラバスの利用について尋ねたQ1は3.36という数値から、必ずしも利用されていないという実態が示されているが、これはむしろ個々の院生に合わせた指導がなされていることの流れでもある。授業の理解度を問うたQ3についても研究科全体で4.45あり、学生は学習内容をかなりの程度消化できており、またQ4とQ5から、大学院の授業は新しい知見を得る場として機能していることがわかる。現在、大学院の授業は究極の少人数教育となっているため、個々の学生に合わせたきめ細やかな指導が実施できているとあってよい。それが大学院生の高い満足度をもたらしていると思われる。ただし、院生数の少なさは、院生に孤立感を感じさせるというマイナスの側面にもなる。自由記述の中に、院生間のつながりを求める声があったことも留意する必要があるだろう。今後、複数教員による指導が導入されれば、院生同士の交流も広がるかもしれない。

表VI-1-1(表中の平均値は学生の回答を5段階で数値化して算出)

Q1 総合的に判断して、この授業に満足できた。								
	計	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる	無回答	平均値
人文社会科学研究科	11	0	0	1	1	9	0	4.73
地域文化論専攻	5	0	0	0	1	4	0	4.80
社会科学専攻	6	0	0	1	0	5	0	4.57

Q2 授業内外の学習に取り組むために、シラバスを活用した。								
	計	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる	無回答	平均値
人文社会科学研究科	11	1	2	2	4	2	0	3.36
地域文化論専攻	5	0	1	1	2	1	0	3.60
社会科学専攻	6	1	1	1	2	1	0	3.17

Q3 この授業の内容について理解できた。								
	計	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる	無回答	平均値
人文社会科学研究科	11	1	0	0	2	8	0	4.45
地域文化論専攻	5	0	0	0	1	4	0	4.60
社会科学専攻	6	0	0	1	0	5	0	4.33

## Q4 新しい知識・考え方・技術が獲得できた。

	計	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる	無回答	平均値
人文社会科学 研究科	11	0	0	0	2	9	0	4.82
地域文化論専攻	5	0	0	0	1	4	0	4.80
社会科学専攻	6	0	0	1	1	5	0	4.83

## Q5 この授業の受講によって、学業への興味・関心(意欲)が高まった

	計	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる	無回答	平均値
人文社会科学 研究科	11	0	0	1	1	9	0	4.73
地域文化論専攻	5	0	0	0	1	4	0	4.80
社会科学専攻	6	0	0	1	0	5	0	4.67

## Q6 この授業で学んだことや考え方について、意識するようになり、実際に試してみたりした。

	計	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる	無回答	平均値
人文社会科学 研究科	11	0	0	1	5	5	0	4.36
地域文化論専攻	5	0	0	0	2	3	0	4.60
社会科学専攻	6	0	0	1	3	2	0	4.17

## Q7 学びを深めるために、調べたり尋ねたりした。

	計	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる	無回答	平均値
人文社会科学 研究科	11	0	0	0	4	7	0	4.64
地域文化論専攻	5	0	0	0	2	3	0	4.60
社会科学専攻	6	0	0	0	2	4	0	4.67

## Q8 授業1回あたりの授業外学習は何時間でしたか。

	計	30分未満	1時間未満	2時間未満	4時間未満	4時間以上	無回答	平均値
人文社会科学 研究科	11	4	1	5	3	3	0	2.59
地域文化論専攻	5	4	1	2	1	2	0	4.07
社会科学専攻	6	2	2	0	6	1	0	3.88

## Q9 この授業を何回欠席しましたか。

	計	0回	1回	2回	3~4回	5回以上	無回答	平均値
人文社会科学研 究科	11	54.5%	27.3%	9.1%	9.1%	—	—	
地域文化論専攻	5	4	1	0	0	3	0	
社会科学専攻	6	4	1	1	1	3	0	

## その他自由記述

## 【先生に続けてほしいと思うこと】

- ・教材選定はいま一つでしたが、〇〇先生のご講義は最高でした。先生に続けてほしいこと＝〇〇先生に続けていただくことです。

## 【自分が先生だったらしたいと思うこと】

- ・院生の設備を整えてほしいです。院生等の交流が皆無な2年間でした。院生室がしっかり作られていたら様々な情報を交換でき、意識を高めあうことができると思います。せめて顔や名前を知る機会がほしかったです。
- ・人種、年齢、性別の異なる人を集めてディスカッションをしてみたい。自分が先生だったら、それこそが国際大学にしかできない醍醐味ではないか。

期間：2017/07/17(月) 00:00～2017/07/30(日) 23:59

対象人数(延べ数)：124人 回答人数(延べ数)：7人 回答率 5.6%

### 2017(H29)年度J前期 授業アンケート

この調査の目的は、学生が自らの学びを振り返り改善できるように、学びの履歴を提供すること、そして大学が教育を改善するための情報を得ることです。

以下の設問には、すべて、授業だけではなく、授業外学習も含めて、回答してください。

※大学の単位制度：

講義の場合、1回あたり90分の授業と4時間の授業外学習を必要とする内容に対して、2単位が配当されています。

## 学びの振り返りシート

### I あなたの学びに関する項目

以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。

項目	比率	人数	得点
1 総合的に判断して、この授業に満足できた。(必須)			4.7点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	14%	1人	
ややあてはまる	0%	0人	
あてはまる	86%	6人	
2 授業内外の学習に取り組むために、シラバスを活用した。(必須)			3.4点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	29%	2人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	71%	5人	
あてはまる	0%	0人	
3 この授業の内容について理解できた。(必須)			4.4点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	57%	4人	
あてはまる	43%	3人	
4 新しい知識・考え方・技術などが獲得できた。(必須)			5.0点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	0%	0人	
あてはまる	100%	7人	
5 この授業の受講によって、学業への興味・関心(意欲)が高まった。(必須)			4.9点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	14%	1人	
あてはまる	86%	6人	
6 この授業で学んだことや考え方について、意識するようになり実際に試してみたりした。(必須)			4.4点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	57%	4人	
あてはまる	43%	3人	
7 学びを深めるために、調べたり尋ねたりした。(必須)			4.6点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	43%	3人	
あてはまる	57%	4人	
8 授業1回当たりの授業外学習(予習・復習・課題や試験のための学習・関連する読書や活動など)は何時間でしたか。(必須)			3.1点
30分未満	0%	0人	
30分～1時間未満	0%	0人	
1時間～2時間未満	86%	6人	
2時間～4時間未満	14%	1人	
4時間以上	0%	0人	

Copyright © 2006 Jan System Techniques Co., Ltd. All rights reserved

## VI. 大学院に関するFD活動

9 この授業を何回欠席しましたか。(必須)	比率	人数	1.0点
0回	100%	7人	
1回	0%	0人	
2回	0%	0人	
3~4回	0%	0人	
5回以上	0%	0人	

### II 4つの力に関する項目①

以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。(4つの力は授業外学習も含め、大学生としての活動のすべてを通して身につけるものです。さらに、各授業においても、4つの力の重点度には軽重があります。その意味で、いくつか「成長しなかった」でも結構ですので、4つの力のすべてに回答してください。)

10 この授業を通して、「感じる力」が成長したと思う。(必須)	比率	人数	3.0点
全く成長しなかった	0%	0人	
わずかながら成長した	0%	0人	
少し成長した	0%	0人	
ある程度成長した	100%	7人	
かなり成長した	0%	0人	
11 この授業を通して、「考える力」が成長したと思う。(必須)	比率	人数	3.1点
全く成長しなかった	0%	0人	
わずかながら成長した	0%	0人	
少し成長した	0%	0人	
ある程度成長した	86%	6人	
かなり成長した	14%	1人	
12 この授業を通して、「コミュニケーション力」が成長したと思う。(必須)	比率	人数	3.0点
全く成長しなかった	0%	0人	
わずかながら成長した	0%	0人	
少し成長した	0%	0人	
ある程度成長した	100%	7人	
かなり成長した	0%	0人	
13 この授業を通して、「生きる力」が成長したと思う。(必須)	比率	人数	3.0点
全く成長しなかった	0%	0人	
わずかながら成長した	0%	0人	
少し成長した	0%	0人	
ある程度成長した	100%	7人	
かなり成長した	0%	0人	

### III 4つの力に関する項目②

以下の「4つの力の構成要素」の観点について、この授業を通して成長したと思えるものを選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。

感じる力	人数
14.感性	7人
15.共感	7人
16.倫理観	7人
17.モチベーション	0人
18.主体的学習力	7人
19.心身の健康に対する意識	0人
考える力	人数
20.幅広い教養	7人
21.専門知識・技術	7人
22.論理的思考力	7人
23.批判的思考力	7人
24.課題探求力	7人
25.問題解決力	7人
コミュニケーション力	人数
26.情報受信力	7人
27.討論・対話力	5人
28.指導力・協調性	1人
29.社会人としての態度	1人
30.実践外国語力	2人

(以下、「授業改善のためのアンケート」です。)

### 授業改善のためのアンケート

#### IV 教育改善の項目

この授業をもっとよくするためには、どのような点を改善すればいいと考えますか。以下の項目から選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。

授業の概要の説明(口頭、シラバスなどによる)	人数
31.授業の目的・到達目標の説明	0人
32.授業全体の計画、学習内容の説明	0人

33.成績評価の方法、評価基準の説明	0人
<b>教室内で使用する教材</b>	人数
34.授業内で提示される資料(板書や投影資料など)	0人
35.配布資料・Web資料など(Moodleも含む)	0人
<b>教員の行動</b>	人数
36.話し方(聞き取りやすさなど)	0人
37.わかりやすい説明	0人
38.発展的な内容の説明	0人
39.学習内容の具体的な活用方法の説明	0人
40.私語/遅刻/睡眠/携帯メールなど不謹慎な行動への対処	0人
<b>学生参加の機会</b>	人数
41.学生自身に考えさせる工夫	0人
42.質問の機会	0人
43.学生との対話の機会	0人
44.学生同士で考えを深め合う場や機会の提供や支援	0人
44.補足 (グループ活動の実施や支援など)	
<b>授業外学習のための支援</b>	人数
45.自学自習のための教材/資料等の情報	0人
46.授業時間外での課題(宿題も含む)	0人
47.学習に対する助言や補足	0人
48.質問や課題への適切な対応	0人
49.Moodleや電子メールなどの使用	0人
45.の補足 (参考図書・参考資料等も含む)	
<b>その他教員から指定のある項目</b>	人数
50.(教員が指定する項目)	0人

- V 授業改善に関する記述欄  
それぞれ240文字以内で記入してください。
- 51.先生に続けてほしいと思うこと。
- 52.自分が先生だったらこうしたいと思うこと。

## VI. 大学院に関するFD活動

期間：2018/01/22(月) 00:00～2018/02/04(日) 23:59

対象人数(延べ数)：118人 回答人数(延べ数)：7人 回答率 5.9%

### 2017(H29)年度後期 授業アンケート(回答期間：2018/1/22～2/4)

この調査の目的は、学生が自らの学びを振り返り改善できるように、学びの履歴を提供すること、そして大学が教育を改善するための情報を得ることです。

以下の設問には、すべて、授業だけではなく、授業外学習も含めて、回答してください。

※大学の単位制度：

講義の場合、1回あたり90分の授業と4時間の授業外学習を必要とする内容に対して、2単位が配当されています。

### 学びの振り返りシート

#### I あなたの学びに関する項目

以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。

項目	比率	人数	点数
1 総合的に判断して、この授業に満足できた。(必須)			5.0点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	0%	0人	
あてはまる	100%	7人	
2 授業内外の学習に取り組むために、シラバスを活用した。(必須)			5.0点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	0%	0人	
あてはまる	100%	7人	
3 この授業の内容について理解できた。(必須)			5.0点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	0%	0人	
あてはまる	100%	7人	
4 新しい知識・考え方・技術などが獲得できた。(必須)			5.0点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	0%	0人	
あてはまる	100%	7人	
5 この授業の受講によって、学業への興味・関心(意欲)が高まった。(必須)			5.0点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	0%	0人	
あてはまる	100%	7人	
6 この授業で学んだことや考え方について、意識するようになり実際に試してみたりした。(必須)			5.0点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	0%	0人	
あてはまる	100%	7人	
7 学びを深めるために、調べたり尋ねたりした。(必須)			5.0点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	0%	0人	
あてはまる	100%	7人	
8 授業1回当たりの授業外学習(予習・復習・課題や試験のための学習・関連する読書や活動など)は何時間でしたか。(必須)			3.0点
30分未満	0%	0人	
30分～1時間未満	0%	0人	
1時間～2時間未満	100%	7人	
2時間～4時間未満	0%	0人	
4時間以上	0%	0人	

Copyright © 2006 Japan System Techniques Co., Ltd. All rights reserved

9 この授業を何回欠席しましたか。(必須)	比率	人数	1.9点
0回	14%	1人	
1回	86%	6人	
2回	0%	0人	
3~4回	0%	0人	
5回以上	0%	0人	

## II 地域に関する学びの項目(関連がなかった授業では回答しないでください)

10 この授業の受講によって、三重県や地域への興味・関心が高まった。	比率	人数	5.0点
あてはまらない	0%	0人	
あまりあてはまらない	0%	0人	
どちらともいえない	0%	0人	
ややあてはまる	0%	0人	
あてはまる	100%	4人	

## III 4つの力に関する項目(1)

以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。(4つの力は授業外学習も含め、大学生としての活動のすべてを通して身につけるものです。さらに、各授業においても、4つの力の重点度には軽重があります。その意味で、いくつか「成長しなかった」でも結構ですので、4つの力のすべてに回答してください。)

11 この授業を通して、「感じる力」が成長したと思う。(必須)	比率	人数	3.0点
全く成長しなかった	0%	0人	
わずかながら成長した	0%	0人	
少し成長した	0%	0人	
ある程度成長した	100%	7人	
かなり成長した	0%	0人	
12 この授業を通して、「考える力」が成長したと思う。(必須)	比率	人数	3.1点
全く成長しなかった	0%	0人	
わずかながら成長した	0%	0人	
少し成長した	0%	0人	
ある程度成長した	86%	6人	
かなり成長した	14%	1人	
13 この授業を通して、「コミュニケーション力」が成長したと思う。(必須)	比率	人数	3.1点
全く成長しなかった	0%	0人	
わずかながら成長した	0%	0人	
少し成長した	0%	0人	
ある程度成長した	86%	6人	
かなり成長した	14%	1人	
14 この授業を通して、「生きる力」が成長したと思う。(必須)	比率	人数	3.0点
全く成長しなかった	0%	0人	
わずかながら成長した	0%	0人	
少し成長した	0%	0人	
ある程度成長した	100%	7人	
かなり成長した	0%	0人	

## IV 4つの力に関する項目(2)

以下の「4つの力の構成要素」の観点について、この授業を通して成長したと思えるものを選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。

感じる力	人数
15.感性	3人
16.共感	3人
17.倫理観	4人
18.モチベーション	4人
19.主体的学習力	4人
20.心身の健康に対する意識	3人
考える力	人数
21.幅広い教養	5人
22.専門知識・技術	2人
23.論理的思考力	6人
24.批判的思考力	1人
25.課題探求力	6人
26.問題解決力	1人
コミュニケーション力	人数
27.情報発信力	4人
28.討論・対話力	4人
29.指導力・協調性	3人
30.社会人としての態度	3人
31.実践外国語力	2人

(以下、「授業改善のためのアンケート」です。)

## 授業改善のためのアンケート



## VI. 大学院に関するFD活動

### V 教育改善の項目

この授業をもっとよくするためには、どのような点を改善すればいいと考えますか。以下の項目から選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。

項目	人数
<b>授業の概要の説明(口頭、シラバスなどによる)</b>	
32.授業の目的・到達目標の説明	2人
33.授業全体の計画、学習内容の説明	1人
34.成績評価の方法、評価基準の説明	4人
<b>教室内で使用する教材</b>	
35.授業内で提示される資料(板書や投影資料など)	3人
36.配布資料・Web資料など(Moodleも含む)	5人
<b>教員の行動</b>	
37.話し方(聞き取りやすさなど)	0人
38.わかりやすい説明	0人
39.発展的な内容の説明	4人
40.学習内容の具体的な活用方法の説明	4人
41.私語/遅刻/睡眠/携帯メールなど不謹慎な行動への対処	0人
<b>学生参加の機会</b>	
42.学生自身に考えさせる工夫	2人
43.質問の機会	1人
44.学生との対話の機会	3人
45.学生同士で考えを深め合う場や機会の提供や支援	3人
45.補足 (グループ活動の実施や支援など)	
<b>授業外学習のための支援</b>	
46.自学自習のための教材/資料等の情報	0人
47.授業時間外での課題(宿題も含む)	0人
48.学習に対する助言や補足	0人
49.質問や課題への適切な対応	1人
50.Moodleや電子メールなどの使用	7人
46.の補足 (参考図書・参考資料等も含む)	
<b>その他教員から指定のある項目</b>	
51.(教員が指定する項目)	0人

### VI 授業改善に関する記述欄

それぞれ240文字以内で記入してください。

- 52.先生に続けてほしいと思うこと。
- 53.自分が先生だったらこうしたいと思うこと。

## 2. 「三重の文化と社会」報告会、修士論文発表会への教員の参加

本年度も大学院FD活動として、修士1年次生の選択科目「三重の文化と社会」の学内報告会と現地報告会、および終了年次生による修士論文発表会への参加を教員に促した。

出席はのべ34名であり、昨年度から6名増加した。ここ3年では最高の参加者数であるが、アンケートの自由記述でも、参加者が少ないという声が複数寄せられ、実数は多いとは言えない。今後も参加の呼びかけ方法などを考慮すべきであろう。しかしながら「三重の文化と社会」（現地報告会、学内報告会）、修士論文発表会はそれぞれ充実したものとなった。「三重の文化と社会」の現地報告会については、参加する教員が増え、大変盛況で内容も充実していた。

なお、「三重の文化と社会」は、毎年、三重県内のひとつの地域を選んで、院生がフィールドワークないし文献調査を実施して報告書を作成し、地元で市民に開かれた報告会を開催し、さらには大学院広報誌『TORIO』に要約を掲載して、大学と地域の交流を図る科目である。今年度はいなべ市をその対象とした。

### ① 報告会への参加教員の所属

下記に記した数はアンケートの回収数であり、実際にはこれより多くの教員の参加があった。昨年度より現地報告会、修士論文発表会への参加者は増えている。

表IV-2-1 参加教員の所属 (単位：人)

	地域文化論専攻	社会科学専攻	計
「三重の文化と社会」 学内報告会	5	0	5
「三重の文化と社会」 現地報告会	3	4	7
修論発表会	12	9	22 (無回答 1)
全体	20	13	34

### ② 参加教員の指導院生による報告

参加した教員のうち、指導する学生の報告がない教員が6割近くあった。現状において、当研究科に在籍する院生数は限られており、そのため修士論文を指導しない教員も多いことが反映されているといえる。しかし大学院の授業科目において院生を指導する機会は決して少なくなく、また、大学院教育を研究科全体で支えていくためにも、このような報告会への参加によって院生のレベルの把握することは、大変有意義である。今年度の1年生から、大学院での複数指導教員による指導体制が始まったので、参加者の増加はそれを反映しているかもしれない。今後も指導学生の有無にかかわらず、報告会への参加が増加することが望ましい。

表IV-2-2 参加教員の指導院生による報告の有無

	あった	なかった	計
「三重の文化と社会」 学内報告会	3 75.0%	1 25.0%	5 (無回答 1) 100.0%
「三重の文化と社会」 現地報告会	2 28.5%	5 71.5%	7 100.0%
修論発表会	9 40.9%	13 59.1%	22 100.0%
全体	14 41.2%	19 58.8%	34 100.0%

## ③ 発表内容について

「三重の文化と社会」の学内報告会と現地報告会、および修士論文発表会を総計すると、「レベルが高い」が33.4%、「ややレベルが高い」が50.0%で、合わせると優に80%を超え、これは昨年度に比べ倍の伸びであった。「どちらともいえない」と「ややレベルが低い」がそれぞれ8.7%、人数にすると各1名と少なかった。

「三重の文化と社会」の報告会と修論発表会を比較すると、「三重の文化と社会」の報告会は「レベルが高い」と「ややレベルが高い」で83%以上であったのに対して、昨年度は報告会に比べて低い評価であった修論発表会でも80%を超えており、差が縮まった。前者の評価の方が高い傾向はここ数年変わらず、「レベルが高い」という評価は現地報告会に顕著だが、修士論文発表会のレベルも全体的に安定してきた。選択科目である「三重の文化と社会」には意欲のある受講生が多いことに加え、この授業では教員による細やかな指導が効果を挙げているものと考えられる。受講した学生には、学内と現地の両方における報告会が義務付けられており、当初より学生たちは研究成果を発表することを意識して受講している。他方、修士論文の場合、論文執筆こそが一義的であり、その評価の場は論文の口頭試問であるとの捉え方が学生と教員双方にあると思われる。確かに、大学院生にとって修士課程で行った研究を、報告会の短時間の口頭報告で伝えるのは容易なことではないことは理解できるが、狭い専門領域に限定せず研究成果を解りやすい言葉で伝える能力も、大学院教育において形成すべき重要な資質である。複数指導体制を口頭発表の機会として利用するなど指導方法の工夫のなどによって、何らかの対策を検討すべきであろう。

表IV-2-3 発表内容について（「三重の文化と社会」は学内・学外の合計、以下同じ）

	レベルが 高い	ややレベ ルが高い	どちらとも いえない	ややレベル が低い	レベルが低 い	無回答	計
「三重の文化 と社会」	4 33.4%	6 50.0%	1 8.3%	1 8.3%	0 0.0%	0 0.0%	12 100.0%
修論発表会	6 27.3%	12 54.5%	2 9.1%	0 0.0%	0 0.0%	2 9.1%	22 100.0%
全体	10 29.5%	18 52.9%	3 8.8%	1 2.9%	0 0.0%	2 5.9%	34 100.0%

## ④ 発表の形式について

「整っていた」と「やや整っていた」の合計が、「三重の文化と社会」報告会では100%、修論発表会でも91%と、発表の形式についてはかなり高く評価されている。特に形式については指導教員の指導が行き届いていることが、アンケートの自由記述でも指摘されていた。「三重の文化と社会」報告会と修論発表会とを比較すると、例年、前者の評価の方がやや高く、③で述べた両者の報告会参加者や性格の違いによる部分もあると考えられてきたが、それは今年度についても同様であることが自由記述からもうかがえる。今年度は、特に修士論文発表会で「整っていた」という高い評価が多いことを肯定的にとらえたい。「どちらともいえない」という回答も昨年比で減っており、修士論文発表会でこれまでに見られた、地域文化論専攻と社会科学専攻とで評価に違いや、他分野の報告に対して厳しい評価を下す傾向がなくなったということは、大学院生たちの研究内容を公の場で口頭発表をする技術の向上を語っているだろう。

表IV-2-4 発表の形式について

	整ってい た	やや整っ ていた	どちらとも いえない	やや整って いない	整ってい ない	無回答	計
「三重の文 化と社会」	6 50.0%	6 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	12 100.0%
修論発表会	13 59.1%	7 31.9%	1 4.5%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.5%	22 100.0%
全体	19 56.0%	13 38.2%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	1 2.9%	34 100.0%

## ⑤ 質疑について

質疑については、「充実していた」と「やや充実していた」の合計が、三重の文化と社会の報告会で91.7%、修論発表会で90.9%と高い評価で、たいへん充実した質疑が行われていたと判断されている。特に、修論発表会では「充実していた」が50%で、内容の充実とも連動して、たいへんよい結果が出ている。最近の評価は上がったり下がったりで一定しなかった。今年は昨年より大きく伸びたが、報告と質疑の高いレベルを維持していくため

には、大学院1年生の修士論文発表会への参加をはじめ、継続的な努力でよい循環を作っていくことが重要である。

表IV-2-5 質疑について

	充実していた	やや充実していた	どちらともいえない	やや充実していなかった	充実していなかった	無回答	計
「三重の文化と社会」	3 25%	8 66.7%	1 8.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	12 100.0%
修論発表会	11 50.0%	9 40.9%	2 9.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	22 100.0%
全体	14 41.2%	17 50.0%	3 8.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	34 100.0%

#### ⑥ 「三重の文化と社会」のあり方についての自由回答

- ・大学院生が集まって何かをする機会はないので、いい場になっていると思います。
- ・院生の研究内容と三重の文化を必ずしも関連づけられるとは限らない。もう少しテーマの範囲を広げて頂いた方が、やりやすく質の高い研究になると思う。
- ・土地土地で研究しやすさがあり、学問分野でさらにその困難がふえてくるので、もう少しとりくみやすいテーマというか形式だといと思います。
- ・継続することが大事だと思います。
- ・指導教授のより強い関与が望ましい。(当日の報告会への参加)
- ・最近を受講生に対する指導教員の指導はよく行き届いているように思います。ただし、分野が比較的固定しているため、より多くの院生、教員が関わられるような工夫も必要かと思えます。

#### ⑦ 「三重の文化と社会」の報告会についての自由回答

- ・参加者が少ない。
- ・第三者からのアドバイスを得る機会としてもっと有効活用すべき。
- ・ディスカッションなどがあると良いかも。
- ・人前でしゃべることに慣れていない学生がおおいので、たいへん有意義だと思いました。
- ・指導教員以外の参画。
- ・周知の徹底。一般への報告会の周知の充実。
- ・一定の参加の義務付けなど。
- ・当アンケートと一般アンケートは統合しても良いのではないか。
- ・最後に地元で関係者に来ていただいて報告会を行うのは意義あることと思います。発表の形式はしっかりしていたと思います。
- ・院生の発表は、学内発表会のコメントをふまえて改善され、よく準備されたわかりやすい報告になっていました。

- ・専門外の内容は、口頭報告とPower Pointの映写（ぼやけて見づらい）だけだと少しつらいので、報告書以外にも手元に資料が欲しいです。」その場で実際の口頭発表と報告書を照合するのが一般の方には難しいのではないかと思います。
- ・学部学生さんですが、豊福先生のゼミ生さんが頑張っていると思いました。

#### ⑧ 修士論文／修士論文指導のあり方についての自由回答

- ・もっと中間発表のようなものがあっていいのかも。
- ・数年前の発表会よりレベルが上がった気がする。（複数回答）
- ・論文1本書くくらいでは、“研究した”という満足感が得られにくいのではないかと思います。
- ・院生の参加がもっと多いとよい。??

#### ⑨ 修士論文発表会のあり方についての自由回答

- ・いろいろ拝見が他分野の先生方から出て、有意義な形式だと思います。
- ・1人15分の発表時間が充分とはいえない。1人20分にしては？発表者の多い専攻を午後にすれば対応可能と考える。
- ・もう少し教員の参加が必要。（複数回答）
- ・おおよそ発表はしっかりしていたと思う。

#### ⑩ 大学院教育に関する意見

- ・個々の先生方による指導の努力を知ることができました。
- ・一人で指導するにはどうしても偏る。複数教員による対応がのぞましい。

#### ⑪ 小括

本年度も「三重の文化と社会」報告会・現地報告会、修論発表会に教員の参加をうながした。しかし、今年度も教員の参加は限定的であったと言わねばならない。確かに、さまざまな分野の教員から意見をもらう場は院生にとって有益であり、教員にとっても指導学生以外の院生のレベルの把握や情報の共有、修士号の質の保証等から鑑みれば意義は小さくないものの、時期的な制約もあり、残念ながら改善しにくい側面もある。また修士論文発表会については、導入された経緯もあって、必ずしも教員の間においてもその意義や役割に認識の一致を見ていないのが実情ではないか。

昨年度との変化は、報告の内容や形式、発表後の質疑応答まで、全体的に評価が高かったという喜ばしい変化であった。特に修士論文発表会での発表と質疑の充実が目をつけた。報告者の数が報告数自体は昨年度よりも多かったが、報告のレベルに難のある発表がいくつか見られた点である。アンケートの自由記述には、指導教員の指導の徹底への言及が複数あり、現地報告会や修士論文発表会の定着とともに、指導法も確実に蓄積され、大学院教育の充実がうかがえる。発表の形式についても高評で、ききやすい発表が多かったこと

を考えると、あらためて、参加者の少ないことが惜しまれる。アンケートには、広報の強化から参加を義務づけるなど、強く参加者増を促す意見があった。多様な分野で大学院生の数が増えることで自然増となることが望ましいが、複数指導教員制、さらには全体で大学院教育を支える仕組みが必要であろう。

留学生についても参加させるべきという意見が多かったが、そのためには時期の設定を変えなければならない。年度末の多忙な時期に可能かどうか、悩ましい問題である。

より良い大学院教育を提供するためには、FD活動のみならず、こうした発表会に可能な限り多くの教員が参加し、大学院生の資質や到達度を共有することが有意義である改めて強く感じた。

### 3. 大学院に関するFD研修会

今年度は大学院に関するFD研修会を11月に実施した。大学院改革を進めるうえで、必要な課題や情報の共有をおこなうため、大学院のカリキュラム単位に分かれて、大学院生の指導法についての報告と論議を行った。

日時：2017年11月8日（水） 14:00～15:00

テーマ：大学院生指導のあり方

#### [1] 地域文化論専攻

##### (1) 地域社会文化専修（歴史学、地誌学、図書館・情報学）

出席11名 欠席0名

[大学院生指導のあり方]

報告者：塚本 明

報告の概要：大学院生の指導方法について、日本史における実践が報告された。日本近世史の院生には、1年次における大学院における地域研究の授業である「三重の社会と文化」を履修させていること、三重大学人文学部出身の院生の場合、学部時代に基礎的訓練を厳しく指導していること、地域に貢献できる人材の育成を目標に指導していることなどを、実践に基づいて説明された。

議論の概要：報告に基づいて以下の点が議論された。

- ・「三重の社会と文化」の履修のために修論に遅れが出ることはないか、との質問に対して、授業の履修のメリットの方が大きく、また、その経験は論文作成に生かされている。
- ・修論指導の時間について質問があり、報告者は別に設けているとのことであった。
- ・博士課程の進学希望の学生への対処について議論になり、留学生・社会人から進学希望の学生までの対応の難しさが、議論となった。報告者からは留学生を受け入れないと定員は埋められない現状もあるとの指摘があり、また、もともと研究者志望の院生の場合、より専門性の高い大学院の方が本人のためになるとの意見も出た。
- ・学芸員志望の学生について質問があり、学芸員資格を有する者の中で職に就くものはごくわずかである点や行政の無理解などの現状について意見が交わされ、報告者からは大学院教育によって文化行政に理解のあるような人材の育成を考えているとの発言があった。
- ・大学院入学者の学力についても参加者からの意見が出されたが、報告者は学力については、学部時代に特別な指導を行って補っていることが述べられた。



(2) 地域社会文化論専修（社会学+哲学思想）

出席9名 欠席2名

[大学院生指導のあり方]

報告者：村上直樹

報告の概要：特講、演習の内容については、講義の比率が高い。外国語文献については、扱う頻度は少ない。修士論文指導については、テーマの設定や論の構成にいたるまで指導することがあった。文章の指導は行ったことはないが、フォーマットのチェックは行っている。専門的な知識が不足している社会人入学院生や外国人留学生については、読むべき文献等のリストを渡すなどして、さらなる自学自習を促す必要があるのではないか。複数教員指導体制については、あくまで指導教員がメインの教員として指導し、他の教員は部分的なサポートを行うという形が望ましい。

議論の概要：特講、演習の内容については、講義メインではなく、院生による報告がメインという教員が多かった。外国語文献の使用については、一次資料の精読も含めて毎回という分野もあった。修士論文指導については、かなり細かい事柄にいたるまで指導が必要ではないかとの意見があった。外国人留学生については、協定校からの留学生の場合は日本語に関わる問題が起きることはほとんどないが、専門的な知識が充分でないことがあるとの指摘があった。複数教員指導体制の問題については、「特別研究」をどのように行っているのかに関して、互いの状況確認がなされた。その他、途中で学習意欲を失った院生に対してどのように対応していけばよいのかについても、意見交換がなされた。

(3) 地域言語文化論専修

出席15名 欠席5名

[大学院生指導のあり方]

報告者：小田敦子

報告の概要：

1. 特講・演習では、原文テキストの読解力と批評方法の獲得を目指している。論文作成スケジュールとしては、1年次で作品の精読、論文テーマ及び構成の策定を行い、2年次での完成を目指す。テーマ設定の際にはかなりの指導を行う。
2. 修士課程修了後の進路に関わりなく、学生が実証的で論理的な文章が書けることを到達目標にしている。
3. 英語力の不足する学生に対しては、思考力の涵養に焦点を合わせ、英語による修士論文の出来には目をつぶることもある。
4. 複数指導体制においては、主査となる教員のイニシアティブが大事だ。定期的に全員が集まり、情報を共有する機会が必要だろう。

議論の概要：

1. 研究交流のための機会の確保について
  - ・他大学との交流機会があってもいいのではないか。
  - ・外部の研究会等に参加させて、学生が研究レベルを知る機会が必要ではないか。
2. 博士課程に進学しない学生の指導法
  - ・達成感をもたせたり、モチベーションを維持させる工夫がいる。

## 3. 文章指導の是非について

- ・引用箇所理解が不足している場合があり、実質的な指導が必要ではないか。

## 4. 複数指導体制について

- ・主査・副査間の連携が必要であり、教員間で指導方向を調整した方が良い。

## 〔2〕社会科学専攻

## (1) 地域行政政策専修

出席 14 名 欠席 1 名

[大学院生指導のあり方]

報告者：前田定孝

報告の概要：

- ① 社会人学生の特徴として、社会人学生は社会的知識を体験上持っていること、教員が提供しようとする知識の体系をそのまま受容しないこと、社会人学生の問題意識が教員側の知識の枠を超えていること、入学の動機が特定のテーマの解決を求めるものであることを指摘できる。教員はこうした特徴に合わせた役割を果たすことが求められる。
- ② 「三重の文化と社会」の効用として、直接の研究機会となりうること、同じ目線で学ぶ仲間ができるということ、の二点を挙げるができる。
- ③ 論文指導の開始時期については、社会人学生当人は何が必要な基礎知識なのか不明な状況から出発する以上、最初から論文指導を行うことになる。論文指導においては、教員側に専門的知識が不足している場合にはそれに対応する施策が必要となる。また、論文を書くというコンセンサスの形成が最も困難である。
- ④ 社会人学生の修論にとりくむ期間の設定については、教員側でスケジュール管理を行うべきである。
- ⑤ 先輩・後輩間の関係については、不確定で権力的介入に至りそうな点については社会人学生に対して修了生に尋ねて判断するように促している。また大学院同窓会を研究コミュニティとして活かしたいと構想している。

議論の概要：

①については、唐突に政策論に入る傾向があり学問上の領域と問題意識とをリンクさせることが課題であるとの回答がなされた。また、社会科学の基礎を欠いているとの指摘については、社会人の場合は学部講義に出席できるか否か人によるところがあり学生論集に参加させたとの回答がなされた。さらに、前提知識の習得方法については、論点につきまとめさせることによりその習得は可能であるが、まとめる上で本人が独特の感覚から抜け出ることができないことがあり、これについては他の教員との議論を通じて修正していく必要があるとの指摘がなされた。加えて到達地点については、小論文の活用も一つの手であることが指摘されるとともに、高度職業専門人の養成という小論文制度化の経緯についても説明がなされた。また、小論文の活用・運用方法については従来議論がなされていないこと、実際の運用状況としては大半の場合は修論が提出されており使用例があまりないことも指摘された。

③につき合意していない院生がいるのかという質問に対しては、教員側と院生側との間で修論を書くことに関する認識のズレがあるとの回答がなされた。

(2) 地域経営法務専修

出席 10 名 欠席 1 名

[大学院生指導のあり方]

報告者：豊福裕二

報告の概要：

- ・特講・演習は、文献購読を基本としている。院生によるレジュメ発表が原則であるが、社会人のみの少人数講義の場合はレジュメ発表は課していない。日本語文献を使用している。
- ・修士論文作成に至るまでのスケジュールは、長期履修でなければ、2年で完成が前提である。
- ・修士論文指導は、テーマ設定、構成、文章指導、フォーマットまで、全て指導している。
- ・研究者志望の院生と就職希望の院生への指導は、研究者志望はないが、就職希望者については学術論文として最低限の水準を満たせるように指導している。
- ・社会人入学院生の指導における問題点と対応は、出来る限り参考文献、先行研究を紹介して読ませるようにしている。
- ・外国人留学生の指導における問題点と対応は、出来る限り参考文献、先行研究を紹介し、読ませるようにしている。
- ・複数教員指導体制に関する考えとしては、先行研究や資料等について副指導教員からの示唆をもらえるのは有益である。
- ・新しいカリキュラム、組織における指導のあり方、院生指導の経験から話し合っておきたいトピックスについても報告があった。

議論の概要：以下の内容について議論された。

- ・院生のテーマ設定については、指導教員の専門性と学生の興味にも配慮して決めているが、指導ができる内容に修正するように促している。これについては、受験する際に指導教員の情報提供を行うことが早い段階で指導教員の専門性を知ってもらう機会になる。
- ・社会人の院生については、修士論文執筆に必要な時間を十分に取れない場合もある。これが、修士論文の水準に影響することや大学院を修了できないことにつながるものが課題である。
- ・留学生の秋ごろの試験や入学時期については今後検討する。そこにはビザの問題なども含めて検討する必要がある。
- ・教員数の減少により科目が減っている傾向がある。非常勤講師の採用や法律経済学会の寄付講座など今後検討する。
- ・指導教員の講義が少ないことから、開講スケジュールを検討する必要がある。

## VII. 教員による「FD活動に関するアンケート」

## VII. 教員による「FD活動に関するアンケート」

### 1. アンケートの概要

#### (1) 目的と方法

1月教授会（1月10日）において、来年度以降のFD活動を一層有意義なものとするために、今年度のFD活動と今後に向けての要望等についてのアンケート調査を実施した。本章では、当日の研修参加者を対象に実施したアンケートの結果を示す。

#### (2) 質問項目（巻末資料）

質問項目の大きな分類は、次の通りである。(1)6月FD研修会について、(2)大学院FD活動について、(3)学生による授業アンケートについて、(4)教員による授業アンケートについて、(5)今年度FD活動の良かった点・悪かった点、(6)今後のFD活動の要望。質問の詳細は、巻末資料を参照されたい。

### 2. 調査結果

#### 概要

人文学部教員31名から回答を得た。昨年度は58名であったので、27名減となった。回収方法を変更したことによる影響と考えられる。また、自由記述式の質問については、参考のために抄録ではあるができるだけ多く掲載した。以下、回答内容の概要を記しておく。

例年実施している6月FD研修会に対する興味等（「興味を持ってましたか」「役立ちましたか」）については、昨年同様、研修会への評価は高い。また、11月に実施した大学院FDについては、昨年度のアンケートの自由意見を参考に、地域文化論専攻ではより少人数の形式で行った。昨年同様興味等の数値は高かったが、あまり関心を持ってない、あまり役に立っていないという回答もあり、あり方についての検討が必要かもしれない。「三重の文化と社会」学内報告会ならびに同現地報告会、修士論文発表会に関しては、出席者を増やす努力が必要との意見があった。

また、学生による授業アンケートについては、本年度より全学的にWeb入力で統一されたので、昨年度まで尋ねていた紙媒体やWeb入力の長所、短所についての意見は聴取せず、自由記述という形で意見を聴取した。自由意見のなかでは、回収率や学生の回答意欲についての懸念が示されていた。教員による授業アンケートについては、現状を肯定する意見と変更を要求する意見とに分かれた。

今年度のFD活動全般については、継続性が評価されていることがうかがえる。今後のFD活動への要望に関して積極的なアイデアもいただいているので、参考にしていきたい。

① 6月FD研修会について

6月研修会：テーマ「昨年度の授業評価アンケートと改善方法等について」

VII-1 興味を持ってましたか

単位：人

	計	大いに	やや	あまり	全く	不明	不参加
人文学部	31	13	16	0	0	0	2
		41.9%	51.6%	0.0%	0.0%	0.0%	6.5%

VII-2 役立ちましたか

単位：人

	計	大いに	やや	あまり	全く	不明	不参加
人文学部	31	9	20	0	0	0	2
		29.0%	64.5%	0.0%	0.0%	0.0%	6.5%

自由記述：記述なし

② 大学院FDについて

11月FD研修会「修士論文完成までの大学院生指導のあり方」

VII-3 興味を持ってましたか

単位：人

	計	大いに	やや	あまり	全く	不明	不参加
人文学部	31	13	13	2	0	0	3
		41.9%	41.9%	6.5%	0.0%	0.0%	9.7%

VII-4 役立ちましたか

単位：人

	計	大いに	やや	あまり	全く	不明	不参加
人文学部	31	11	14	3	0	0	3
		35.5%	45.2%	9.7%	0.0%	0.0%	9.7%

自由記述：記述なし

「大学院FDとして「三重の文化と社会」学内報告会、同現地報告会、修士論文発表会への参加をお願いしていますが、この点についてご意見をお書きください。」

#### 自由記述

- ・教育成果や学生の傾向が垣間見られて、興味深い。
- ・参加教員が少ないのが残念です。参加者をふやす工夫も必要かと思います。
- ・参加している教員に限られ、また重なっているため、あまりFDになっていないと思います。多くの教員が参加する工夫が必要かと思います。
- ・参加者を増やすべき。

「大学院FDとして研修会や講演会で取り上げてほしいテーマがありましたら、お書きください。」

#### 自由記述

- ・大学院生の進路指導について
- ・学生を増やすことに関係のある教員への教育活動。
- ・他大学での大学院の取り組みについても考える機会があればよいように思います。(単位互換、国立大学間の協定など)
- ・音信不通になる学生への対応方法。
- ・大人数クラスの対応。

### ③ 学生による授業アンケートについて

#### 自由記述

- ・フィードバックがないのもものたりない。
- ・「4つの力」にまつわる質問項目が無意味すぎる。学生も「アリバイだな」とわかるし、そうすると真面目に答えなくなるだろう。
- ・デジタルで済むのでよかった。
- ・Webアンケートに変わって、学生の回答のまじめさが低下するのでないか気になります。
- ・前期は何度かアナウンスしましたが回収率が良くなかったです。
- ・後期からはiPhoneでもできるようになったようですが、いずれにせよ、学生に回答を促す工夫をしないと、回収率は下がる一方だと思います。

### ④ 教員による授業アンケートについて

#### 自由記述

- ・毎年同じことを書いている気がします。少し変更してみてもどうでしょうか。
- ・今までどおりで。

- ・こちらもデジタルでこたえられるようになってほしい。
- ・なくてもよいのでは。

### ⑤ 今年度 FD 活動の良かった点と悪かった点

#### 自由記述

- ・回数が適当だったと思います。
- ・頻度はこの程度で良いと思う。
- ・無難に継続するしかないと思います。
- ・大学院教育については、これまで他の先生方の方法についてあまり情報共有がなかった  
ので、参考になった。

### ⑥ 今後の FD 活動に対する要望

#### 自由記述

- ・継続することも重要と思います。
- ・魅力ある大学・大学院にするためのアイデアを出し合う機会があるとよいように思います。
- ・学生への対応・トラブルなどの情報を共有できる FD があると良いと思います。
- ・FD 活動をやめてほしい。



# 卷末資料

巻末資料1

2017 (H29) 年度後期 授業アンケート (回答期間 : 2018/1/22~2/4)

この調査の目的は、学生が自らの学びを振り返り改善できるように、学びの履歴を提供すること、そして大学が教育を改善するための情報を得ることです。

以下の設問には、すべて、授業だけではなく、授業外学習も含めて、回答してください。

※大学の単位制度：

講義の場合、1回あたり90分の授業と4時間の授業外学習を必要とする内容に対して、2単位が配当されています。

学びの振り返りシート

I あなたの学びに関する項目

以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。

- 1 総合的に判断して、この授業に満足できた。 (必須)
  - あてはまらない
  - あまりあてはまらない
  - どちらともいえない
  - ややあてはまる
  - あてはまる
- 2 授業内外の学習に取り組むために、シラバスを活用した。 (必須)
  - あてはまらない
  - あまりあてはまらない
  - どちらともいえない
  - ややあてはまる
  - あてはまる
- 3 この授業の内容について理解できた。 (必須)
  - あてはまらない
  - あまりあてはまらない
  - どちらともいえない
  - ややあてはまる
  - あてはまる
- 4 新しい知識・考え方・技術などが獲得できた。 (必須)
  - あてはまらない
  - あまりあてはまらない
  - どちらともいえない
  - ややあてはまる
  - あてはまる
- 5 この授業の受講によって、学業への興味・関心(意欲)が高まった。 (必須)
  - あてはまらない
  - あまりあてはまらない
  - どちらともいえない
  - ややあてはまる
  - あてはまる

- 6 この授業で学んだことや考え方について、意識するようになり実際に試してみたりした。(必須)
- あてはまらない
  - あまりあてはまらない
  - どちらともいえない
  - ややあてはまる
  - あてはまる
- 7 学びを深めるために、調べたり尋ねたりした。(必須)
- あてはまらない
  - あまりあてはまらない
  - どちらともいえない
  - ややあてはまる
  - あてはまる
- 8 授業1回当たりの授業外学習(予習・復習・課題や試験のための学習・関連する読書や活動など)は何時間でしたか。(必須)
- 30分未満
  - 30分～1時間未満
  - 1時間～2時間未満
  - 2時間～4時間未満
  - 4時間以上
- 9 この授業を何回欠席しましたか。(必須)
- 0回
  - 1回
  - 2回
  - 3～4回
  - 5回以上
- I I 地域に関する学びの項目(関連がなかった授業では回答しないでください)
- 10 この授業の受講によって、三重県や地域への興味・関心が高まった。
- あてはまらない
  - あまりあてはまらない
  - どちらともいえない
  - ややあてはまる
  - あてはまる
- I I I 4つの力に関する項目①
- 以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。(4つの力は授業外学習も含め、大学生としての活動のすべてを通して身につけるものです。さらに、各授業においても、4つの力の重点度には軽重があります。その意味で、いくつか「成長しなかった」でも結構ですので、4つの力のすべてに回答してください。)
- 11 この授業を通して、「感じる力」が成長したと思う。(必須)
- 全く成長しなかった
  - わずかながら成長した
  - 少し成長した
  - ある程度成長した
  - かなり成長した

- 12 この授業を通して、「考える力」が成長したと思う。 (必須)  
 全く成長しなかった  
 わずかながら成長した  
 少し成長した  
 ある程度成長した  
 かなり成長した
- 13 この授業を通して、「コミュニケーション力」が成長したと思う。 (必須)  
 全く成長しなかった  
 わずかながら成長した  
 少し成長した  
 ある程度成長した  
 かなり成長した
- 14 この授業を通して、「生きる力」が成長したと思う。 (必須)  
 全く成長しなかった  
 わずかながら成長した  
 少し成長した  
 ある程度成長した  
 かなり成長した

IV 4つの力に関する項目②

以下の「4つの力の構成要素」の観点について、この授業を通して成長したと思えるものを選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。

感じる力

- 15.感性
- 16.共感
- 17.倫理観
- 18.モチベーション
- 19.主体的学習力
- 20.心身の健康に対する意識

考える力

- 21.幅広い教養
- 22.専門知識・技術
- 23.論理的思考力
- 24.批判的思考力
- 25.課題探求力
- 26.問題解決力

コミュニケーション力

- 27.情報受発信力
- 28.討論・対話力
- 29.指導力・協調性
- 30.社会人としての態度
- 31.実践外国語力

(以下、「授業改善のためのアンケート」です。)

## 授業改善のためのアンケート

### V 教育改善の項目

この授業をもっとよくするためには、どのような点を改善すればいいと考えますか。以下の項目から選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。

授業の概要の説明（口頭、シラバスなどによる）

- 32.授業の目的・到達目標の説明
- 33.授業全体の計画、学習内容の説明
- 34.成績評価の方法、評価基準の説明

教室内で使用する教材

- 35.授業内で提示される資料（板書や投影資料など）
- 36.配布資料・Web 資料など（Moodle も含む）

教員の行動

- 37.話し方（聞き取りやすさなど）
- 38.わかりやすい説明
- 39.発展的な内容の説明
- 40.学習内容の具体的な活用方法の説明
- 41.私語/遅刻/睡眠/携帯メールなど不謹慎な行動への対処

学生参加の機会

- 42.学生自身に考えさせる工夫
- 43.質問の機会
- 44.学生との対話の機会
- 45.学生同士で考えを深め合う場や機会の提供や支援

### 45.補足

（グループ活動の実施や支援など）

授業外学習のための支援

- 46.自学自習のための教材/資材等の情報
- 47.授業時間外での課題（宿題も含む）
- 48.学習に対する助言や補足
- 49.質問や課題への適切な対応
- 50.Moodle や電子メールなどの使用

### 46.の補足

（参考図書・参考資料等も含む）

その他教員から指定のある項目

- 51.（教員が指定する項目）

### VI 授業改善に関する記述欄

それぞれ 240 文字以内で記入してください。

- 52.先生に続けてほしいと思うこと。
- 53.自分が先生だったらこうしたいと思うこと。





巻末資料 4

2017 年度 FD 活動に関するアンケート

所属 (○印) : 1. 文化学科 2. 法律経済学科

I. 6月 FD 研修会について、以下の質問にお答えください。

※テーマ：昨年度の授業評価アンケートの分析と改善方法等について

- (1) 興味をもてましたか。
1. 大いに興味をもてた      2. やや興味をもてた      3. あまり興味をもて  
 なかった      4. 全く興味をもてなかった      5. わからない      6. 不参加
- (2) ご自身の FD に役立ちましたか。
1. 大いに役立った      2. やや役立った      3. あまり役立たなかった  
 4. 全く役立たなかった      5. わからない      6. 不参加
- (3) 研修会の内容、運営の仕方などについて、ご意見があればお書きください。

II. 大学院 FD 活動について

1. 11月研修会 (専修単位)

テーマ：「大学院生指導のあり方」

- (1) 興味をもてましたか。
1. 大いに興味をもてた      2. やや興味をもてた      3. あまり興味をもて  
 なかった      4. 全く興味をもてなかった      5. わからない      6. 不参加
- (2) ご自身の FD に役立ちましたか。
1. 大いに役立った      2. やや役立った      3. あまり役立たなかった  
 4. 全く役立たなかった      5. わからない      6. 不参加
- (3) 研修会の内容、運営の仕方などについて、ご意見があればお書きください。

2. 今年度も、大学院 FD 活動として「三重の文化と社会」学内報告会、同現地報告会、  
 修士論文発表会への参加を予定していますが、この点についてのご意見があればお  
 書きください。

3. 研修会や講演会で取り上げてほしい大学院 FD に関するテーマがありましたら、お  
 書きください。



Ⅲ. 学生授業アンケートについて

今年度から始まった新たな学生授業アンケート全般について、ご意見があればお書きください。

Ⅳ. 教員アンケートについて

学生授業アンケートと同時に実施している教員アンケートに関するご意見・ご希望等がありましたら、お書きください。

Ⅴ. 今年度のFD活動の良かった点や悪かった点をお書きください。

Ⅵ. 今後のFD活動に対するご要望がありました、お書きください。

ご協力ありがとうございました。

## 1. 委員会の構成

委員長 石塚哲朗 学部長補佐 麻野雅子  
委員 村上直樹 委員 小田敦子

## 2. 委員会の開催

第1回FD委員会 4月19日(水)

1. 年間計画について
2. 予算について
3. 議事録について
4. その他

第2回FD委員会 5月17日(水)

1. 6月FD研修会について
2. 9月FD講演会について
3. 授業アンケート実施方法変更について
4. FD活動資料のHPへの掲載について
5. その他

第3回FD委員会 7月19日(水)

1. 6月研修会について(報告)
2. 授業アンケート・教員アンケートについて
3. 9月FD講演会について
4. 大学院FDについて
5. その他

第4回FD委員会 9月20日(水)

1. 11月FD研修会の内容について
2. FD年間アンケートについて
3. その他

第5回FD委員会 10月18日(水)

1. 11月FD研修会について
2. FD年間アンケートについて
3. 授業アンケートについて
4. その他

第6回FD委員会 12月20日(水)

1. 授業アンケートについて
2. 教員アンケートについて
3. FDアンケートについて
4. 他アンケート(三重の文化と社会、修論発表会)について
5. その他

第7回FD委員会 1月27日(水)

1. 学生授業アンケートについて
2. 教員アンケートについて
3. FD報告書について
4. その他

第8回FD委員会 2月14日(水)

1. FD報告書の作成について
2. 授業アンケート対象科目について
3. その他

第9回FD委員会 月日(水)

### 3. FD研修会の開催

6月FD研修会 6月14日(水) 14:00~15:00

両学科のカリキュラム単位(計8つ)での実施

テーマ: 2016年度実施の授業アンケートの自己分析とそれもとづく改善方法

内容: 報告者によるテーマに関する報告と討議

### 4. FD講演会の開催

9月FD講演会 9月13日(水) 14:00~15:00

会場 人文学部大会議室

講師 鈴木英一郎氏(三重大学学生総合支援センター)

演題 不登校学生等の対応について

### 5. FDアンケートの実施

(1) 授業アンケート(前期・後期)の実施

ユニバーサル・パスポートにより実施

(2) 教員授業アンケート(前期・後期)の実施

学生によるFD授業アンケート期間に実施

講義・演習のあり方や工夫等々に関して教員に尋ねるアンケート

(3) FD 活動総括アンケートの実施

1 月 FD 教授会の際に実施

年間を通した FD 活動（研修会、講演会、アンケート等々）に関する意見を求めるアンケート

## 6. 大学院関係 FD 活動

(1) FD 研修会の開催

11 月 FD 研修会 11 月 8 日（水）14:00～15:00

5 グループに分けて実施

テーマ：大学院生指導のあり方

内容：報告者によるテーマに関する報告と討議

大学院生指導におけるもっとも基本的な事柄の確認と改組後に予定されている複数教員指導体制について討議

(2) 大学院授業アンケートの実施

後期アンケート（ユニバーサル・パスポート）期間に実施

当該大学院生が 2017 年度に履修した授業科目全体に関するアンケート

(3) 修士論文発表会でのアンケート実施

2 月 28 日（水）に専攻単位で実施

(4) 授業科目「三重の文化と社会」院生報告会（学内・現地）でのアンケート実施

1 月 11 日（木）学内報告会で実施

1 月 20 日（土）現地報告会（いなべ市）で実施





P-00061

この印刷物は、CSR  
に取り組む印刷会社が  
製作した印刷物です。



GREEN PRINTING JFPI

P-B10216

この印刷製品は、環境に配慮した  
資材と工場で製造されています。